

十全同窓会会報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会会報
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷(株)

(題字…中村信一 十全同窓会会長)

創立百五十周年記念事業の「報告」

百五十周年記念事業実行委員長・医学類長 多久和 陽
金沢大学医学部十全同窓会会長 中村 信一
金沢大学医学部十全同窓会理事長 大井 章史

金沢大学医学類（医学部）は、平成二十四年（二〇一二年）に迎えた創立百五十周年を記念して、平成二十一年、当時の金子周一医学類長（医学部長）、佐藤保十全同窓会長、古川仰十全同窓会理事長をはじめ諸先生方のリーダーシップにより、以下の五事業が計画されました。一、十全講堂から正門までのメインプロムナード整備事業、二、医学部記念館の改修事業、三、医学部百五十年史の編纂事業、四、百五十周年記念シンポジウムの開催、五、百五十周年記念式典の開催。このたびのプロムナード完成をもって、これら五事業はすべて完了しました。

百五十周年記念事業の実施のために、教職員、十全同窓会員をはじめ関係者の皆様にご寄附を募りました。平成二十一年十月から平成二十七年三月までの六



年間にわたり行ってきた募金は、総額一一一、八五八、六五二円に達しました。別表1に、都道府県別寄附額の一覧を掲載させていただきます。また記念事業実行委員会の決定により、別表2にお示した百万円以上のご寄附をいただいた方に、感謝状を贈呈させていただきます。皆様からのご支援により、各事業を予定通り実施することができたことを厚く御礼申し上げる次第です。募金の決算は別表3のとおりです。メインプロムナード



整備事業は、医学部記念館の改修工事と合わせて、国から平成二十六年年度予算二億円を措置していただき、皆様から賜った百五十周年記念事業募金約六千万円と十全同窓会からのご寄附四千万円を合わせた一億円の、合計約三億円が充てられた大規模なキャンパス整備事業として実施されたことを申し添えます。さらに、この宝町キャンパス整備事業に合わせ、金沢市によって、宝町キャンパスと市道の境界に沿ってキャンパス内に遊歩道が現在整備されつつあります。また、医学部記念館改修事業に合わせ、記念館一階の医学部資料館内の代表的所蔵品展示ケースを更新しましたが、百五十周年記念事業募金とは別に、十全同窓会からのご寄附二千万円をそれに充てさせていただきます。この他、平成二十二年に修復されたキンストレーキの展示用ケース、平成二十五年に完成した新医学図書館の増改築にも、十全同窓会からそれぞれ四百九十三万五千円、三千万円のご寄附を賜りました。

創立百五十周年記念事業の掉尾を飾る医学類メインプロムナード整備事業は本年六月に竣工し、その完成を祝う記念式典が、さる七月二日に医学類キャンパスでとり行われました。記念式典は、馳浩文部科学大臣、石川県および金沢市が

目次

創立百五十周年記念事業の「報告」	1
就任挨拶	4
総会記事	7
教授就任講演	10
受賞	13
学会報告等	14
金沢大学関連病院院長会議	17
御遺骨返還式・合同慰霊祭	17
病院紹介	18
教室だより	20
十全歴史ひろば	22
支部だより	23
医師会コーナー	28
同窓生の消息	29
平成二十八年度オープンキャンパス	29
十全昔話	30
学生コーナー	33
ホームカミングデイ	34
医学展	34
編集後記	34

別表 1
都道府県別寄附合計額

都道府県名	寄附額 (千円)
北海道	227
青森	21
秋田	96
岩手	380
山形	275
宮城	210
福島	390
東京	2,365
神奈川	1,464
千葉	388
茨城	365
栃木	316
埼玉	428
群馬	139
長野	951
山梨	110
静岡	12,149
新潟	428
富山	15,063
石川	53,911
福井	8,899
岐阜	320
愛知	6,733
大阪	1,343
京都	718
三重	135
滋賀	785
奈良	651
和歌山	90
兵庫	776
鳥取	40
島根	48
岡山	79
広島	78
山口	48
香川	67
徳島	45
高知	102
愛媛	258
福岡	83
長崎	20
熊本	20
大分	40
宮崎	74
鹿児島	42
沖縄	689

らのご来賓にご臨席いただき、山崎光悦学長、中村信一十全同窓会長をはじめ多数の十全同窓会員のご出席のもと挙行され、医学類門柱除幕とプロムナード前テープカットがとり行われました。医学類メインプロムナード完成式典の後、附属病院正門に場所を移し、引き続き附属病院環境整備事業完成式典が挙行されました。両式典終了後に、合同の懇親会が医学類内で開かれました。懇親会では、医学類プロムナードおよび医学部記念館の整備事業に要した経費への十全同窓会からの多額の寄附に対して、山崎光悦学長から中村信一十全同窓会長に感謝状が授与されました。諸先生方からご挨拶をいただく中、参加者の間でなごやかに話はずむうちに閉会の時間を迎えました。

平成十九年に医学類教育棟と基礎研究棟の全面改修が成り、さらに一昨年に臨床研究棟の建て替えが続きました。そしてこの度の医学類プロムナードの完成をもちまして、宝町キャンパスの再開発整備事業が完了し、教育、診療、研究の施設が一新されました。施設が一新されたこの新しい医学類キャンパスにおいて、諸先輩の築かれた伝統の上に、日本、そ



して世界を先導する二十一世紀の医学・医療を創造することが私たちの使命であります。世界水準の医療者・研究者として医学・医療の進歩に貢献するとともに、これからの医療、医学研究、行政の各方面におけるリーダーとして活躍する人材

別表2 高額寄附者

【1,000万円以上】		
臼井 溢		(1,100万円)
正橋 剛二		(1,000万円)
【100万円以上】		
大原 教知可		(600万円)
河崎 一夫		(100万円)
小坂 牧子		(300万円)
佐藤 保		(100万円)
竹田 亮祐		(100万円)
田谷 正		(100万円)
疋島 巖		(100万円)
伏田 千恵子		(100万円)
以上敬称略		

の育成に、これまで以上に真摯に熱意を以て取り組んでまいります。
百五十周年記念事業募金、そして宝町キャンパス再開発整備事業が目的を達成できたことは、十全同窓会会員各位のお

力添えの賜であり、深甚の感謝を申し上げます。また、多大のお力添えをいただいた金沢大学関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

医学部創立150周年記念事業 決算

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
寄附	111,858,652	金沢大学基金	アーカイブ関連	1,800,309	
				1,201,725	キンストレーキDVD製作費
寄附	40,000,000	十全同窓会 (プロムナード整備等)		598,584	写真の画像スキャニング
			石碑関連	1,459,500	
寄附	20,000,000	十全同窓会 (記念館展示室改修等)		997,500	石碑 (「金沢医学館跡地」) 設置費
				462,000	除幕式設営等
			モニュメント関連	28,242,500	
				12,495,000	銅像製作費
				7,000,000	塑像製作費
				2,535,750	エスキース (銅像縮小版)
				1,365,000	銘板「医の源流 未来への継承」
				4,483,500	周辺整備費
				363,250	樹脂原型成型費
			記念式典関連	10,127,652	
				5,538,792	記念式典・講演会・祝賀会運営費
				2,060,800	お土産 (USBメモリ、金大煎餅等)
				1,079,360	講演会演者謝金等
				1,050,000	記念式典新聞広告料
				398,700	記念式典関連印刷費 (招待状、チラシ、礼状等)
			医学部記念館関連	19,691,100	
				19,691,100	展示ショーケース
			プロムナード関連	104,428,440	
				96,849,000	工事費
				7,579,440	設計費
			事務費関連	6,109,151	
				4,168,978	事業専従職員人件費
				1,101,000	印刷製本費 (払込取扱票等)
				735,982	消耗品費
				103,191	運搬費
計	171,858,652		計	171,858,652	

就任挨拶

大井 直往博士 (昭和五十七年卒業)

福島県立医科大学医学部リハビリテーション医学講座主任教授に就任



平成二十八年四月より、福島県立医科大学リハビリテーション医学講座教授を拝命しました。二年前から福島県立医科大学附属病院リハビリテーションセンター部長として、おもに病院での診療を中心に行っておりまして。この四月より正式に医学部内リハビリテーション医学講座が開講され、その初代教授に就任しました。

私は金沢大学を昭和五十七年に卒業しました。その前年は国際障害者年にあたり、テレビで毎日何度もアピールの映像が流れ、障害者の社会参加が日本人に知らされた年でした。その時の映像を今でもYouTubeで見ることが出来ます。私が属した学部四年生のBSTのC、Dグ

ループはこんな映像の影響もあったのか、リハビリテーションに興味をもつ人間が多く、井上昭氏(徳島)、大田秀一氏(京都)、生方彰氏(群馬)と私(東京)の四人が整形外科・リハビリテーション科の道を選択しました。特に石川県整肢学院での障害を持つ子供達を診る実習や、医療短期大学立野先生のリハビリテーションの講義など皆で楽しみにしておりました。学生の時の思い出というものはずっと続くもので、私の場合は整形外科の手術に明け暮れた時期もありましたが、結局リハビリテーション医学の道に招かれました。今の福島の学生たちが、疾患を治すだけでなく障害を持つまま生活をする人を支える、より広い役割を担える医師になつてもらうことを目標に教育していきます。また原発事故後の福島の地域リハビリテーション・地域包括ケアシステムの構築にも努力してまいります。

十全同窓会の皆さまのお力添えをどうぞよろしくお願いいたします。

川原 範夫博士 (昭和五十八年卒業)

金沢医科大学整形外科科学講座主任に就任



平成二十八年四月一日に松本忠美教授の後任として金沢医科大学整形外科学講座主任に就任いたしました。

昭和五十八年に金沢大学医学部を卒業し、現金沢大学土屋弘行教授をはじめ、八人の仲間と一緒に金沢大学整形外科に入局しました。野村進名誉教授に「君は馬場久敏君の下で脊椎をやりたい」と言われ脊椎外科の道に入ったわけですが、学位では徹夜で脊髄誘発電位の実験をやりました。富田勝郎名誉教授の開発された腫瘍脊椎骨全摘術の第一例に参加し、その後の発展に関与できたことが一番の思い出であり、誇りです。平成十五年に高度先進医療に指定され、平成二十四年にはついに保険収載にまでこぎつけまし

た。一緒に汗を流した数多くの若い医局員の努力の賜物です。関連する学位論文は三十を数えます。富田先生のお供で米国エモリー大学をはじめ、数多くの大病院で手術をしました。東京大学に招かれ、村上英樹先生と手術をしたのも思い出です。

平成二十二年に金沢医科大学特任教授に着任して以来、松本忠美名誉教授(現金沢医科大学病院院長)のもとで、学生教育や研究指導に励み、脊椎外科領域で患者中心の医療を実践してきたつもりです。平成二十五年からは学生部長を拝命し学生の支援に汗をかいてまいりました。

これまで良き恩師、先輩、同輩、後輩に恵まれてきました。今後は若い教室員がのびのびと研究、診療に打ち込み、可能性を伸ばせるように風通しの良い医局にしていきたいと考えています。医局員の幸せが、患者の幸せにつながれば私も幸せです。

これまで同窓会の皆様には有形無形のご指導、バックアップを賜り誠にありがとうございます。今後ともこれまで同様によりしくお願い申し上げます。

室野 重之博士 (平成四年卒業)

福島県立医科大学耳鼻咽喉科学講座教授に就任



平成二十八年七月一日付けで、福島県立医科大学耳鼻咽喉科学講座教授を拝命いたしました。私は平成四年に金沢大学医学部を卒業後、古川侃教授が主宰されていた耳鼻咽喉科学教室に入局いたしました。

頭頸部癌治療に関心を持ち従事してまいりましたが、癌の根治とQOLの維持という相反する面を通し、音声障害や嚥下障害への対応が重要と痛感しました。吉崎智一教授の奨めもあり音声・嚥下診療を立ち上げるとともに、低侵襲な経口的手術にも取り組んできました。

研究では、古川侃教授、吉崎智一教授のご指導のもと、教室の主要テーマである上咽頭癌とEpstein-Barrウイルスの関連に関する研究に従事してまいりました。近年では、ヒトパピローマウイルスと喉頭乳頭腫や中咽頭癌に関する研究にも取り組み、「ウイルスと腫瘍」は今後

も研究の柱と位置づけています。

福島県特有の事情として、大学では原発事故後の県民健康管理も担っています。福島県立医科大学が中心となっており、震災当時十八歳以下の福島県民三十八万人を対象にした甲状腺検査は三巡目に入っています。北陸三県の合計よりも広い面積を持つ福島県で行うことは容易ではなく、当講座も微かながらお力添えをしています。

私は金沢市に生まれ、米国留学の二年半と富山市と福井市で勤務した各一年を除けば、石川県それも大半を金沢市で過ごしてきました。石川を愛し、金沢を愛しておりますが、今後は福島県における医療人の育成と福島県立医科大学の更なる発展に貢献すべく、尽力する所存です。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。



金沢大学医学部十全同窓会会員情報変更サイトが新しくなります

金沢大学医学部 十全同窓会
会員情報変更受付

— LOGIN —

会員番号 (※半角数字)

パスワード (※半角英数字)

パスワードをお忘れの方 →

LOGIN NOW →

金沢大学医学部 十全同窓会
会員情報変更受付

(1) はじめての方は、事務局より各会員様へお届けしております封筒に記載されている「会員番号」と「仮パスワード」を入力してください。入力やログインがうまくいかない場合は、下記お問い合わせ先までご連絡ください。

(2) 会員番号とパスワードが一致する方のみ、ログインされます。入力内容にお間違えのないようご注意ください。

(3) 操作方法がわからない場合は、下記お問い合わせ先までご連絡ください。

金沢大学医学部 十全同窓会
会員情報変更受付

お問い合わせ先
金沢大学十全同窓会事務局
TEL 076-265-2152 Email: jusen@med.kanazawa-u.ac.jp

十全同窓会

LOGIN 情報は、事務局より各会員あてに郵送でお知らせいたします。

今後お届けする郵便物は慎重にお取り扱い下さいますようお願い申し上げます。

物 故 会 員

吉田 克巳	昭和十四年卒業	小林 次夫	昭和三十一年卒業
加納 光雄	昭和十七年卒業	齋藤 眞	昭和三十一年卒業
川上 正志	昭和十八年専卒業	澤田 大成	昭和三十一年卒業
島崎 実	昭和十九年専卒業	多田 圭三	昭和三十一年卒業
春日井 達造	昭和二十年卒業	新谷 謙次	昭和三十四年卒業
中島 光正	昭和二十年専卒業	稲垣 修	昭和三十五年卒業
柴田 道也	昭和二十三年卒業	坂上 正義	昭和三十五年卒業
染村 舜輔	昭和二十三年卒業	松葉 泰	昭和三十五年卒業
山口 光洋	昭和二十四年卒業	齋藤 榮宏	昭和三十六年卒業
伊藤 昭雄	昭和二十四年専卒業	島野 皓三	昭和三十六年卒業
瀧澤 伊代次	昭和二十四年専卒業	中村 春夫	昭和三十七年卒業
氷見 治	昭和二十四年専卒業	福田 喜雄	昭和三十七年卒業
布村 寛治	昭和二十五年卒業	白井 千博	昭和三十八年卒業
石川 正	昭和二十五年専卒業	久江 清一	昭和三十八年卒業
桜川 文雄	昭和二十五年専卒業	齋藤 滉	昭和四十年卒業
堀地 道郎	昭和二十五年専卒業	島 巖	昭和四十一年卒業
横関 徳二	昭和二十五年専卒業	吉田 善昌	昭和四十二年卒業
小岩井 長雄	昭和二十六年卒業	近藤 勝彦	昭和四十三年卒業
永森 文夫	昭和二十六年卒業	秋山 嘉門	昭和四十四年卒業
宮元 和衛	昭和二十六年卒業	今井 義博	昭和四十四年卒業
山下 晋	昭和二十六年卒業	堀本 豊範	昭和四十五年卒業
大溝 和夫	昭和二十七年卒業	高野 學	昭和四十六年卒業
佐々木 健雄	昭和二十七年卒業	大島 永久	昭和五十四年卒業
船崎 嘉一	昭和二十七年卒業	上田 正登	昭和五十六年卒業
山本 巖	昭和二十七年卒業	齋藤 正行	昭和六十二年卒業
金子 良正	昭和二十八年卒業	竹内 喜洋	平成元年卒業
加藤 邦男	昭和二十九年卒業	西脇 幸博	大学院卒業
川村 昭二	昭和二十九年卒業	井波 英二	Ⅱ 会員
津村 裕	昭和二十九年卒業	大島 輝哉	Ⅱ 会員
正橋 剛二	昭和二十九年卒業	小早川 源郎	Ⅱ 会員
田尻 伸也	昭和三十年卒業	矢吹 俊彦	Ⅱ 会員
平川 秋彦	昭和三十年卒業	山崎 博	Ⅱ 会員

(敬称略)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
 会員のご不幸は当会にご一報をお願いいたします。

総会記事

平成二十八年年度
十全同窓会総会

平成二十八年七月二日(土) 十全同窓会総会が医学部記念館で開催された。

八時四十五分、中村信一会長の開会の辞につづいて、多久和陽医学類長の医学系・医学類報告、堀修医薬保健総合研究科長の医薬保健総合研究科報告が続き、新しくスタートすることになった先進予防医学研究科の発足の経緯について中村裕之研究科長より説明があった。この研究科が千葉大学、長崎大学と共同で、従来の衛生学・公衆衛生学分野を基盤としながら、個人の環境の特性を網羅的に分析・評価し、個別化予防を実現することを目的とした新しい大学院を目指すことがのべられた。

本年度の高安賞は劉光炎氏(分子遺伝学)に最優秀論文賞が、安藝翔氏(血管分子生理学)、笠田篤郎氏(遺伝子・染色体構築)に優秀論文賞が授与された。今回の総会には、全国の十六支部から会員の先生の参加を頂いた。熊本からお越し頂いた若山友彦先生からは震災の状況の説明と、同窓会からの支援に対する謝辞がのべられた。

続いて平成二十七年年度の決算報告、監査報告が承認され、二十八年年度の事業計画及び予算案の説明があり、満場一致で承認された。役員に関しては、副会長に山本博氏、理事に横山茂、安藤仁両氏が新任された。

引きつづき、井上啓、谷口巧、原田憲一教授による教授就任記念講演が開かれた。(講演の要旨は別に掲載)なお平

成二十七年以降の新任教授は山本靖彦(血管分子生物学、旧生化学第二)、華山力成(免疫学)、藤永由佳子(微生物学)、安藤仁(細胞分子機能学)、町田宗仁(国際保健学)である。

医学類プロムナード完成式、附属病院華僑整備事業完成式

同窓会総会に引きつづきプロムナード完成式が十一時三十分から、医学類正門において挙行された。多久和陽医学類長の式辞の後、山崎光悦学長の挨拶があった。参議院選挙の最中にも関わらず馳参じていただいた馳浩文部科学大臣から祝辞を頂戴した。この後、竹中博康副知事、細田大造副市長、中村信一金沢大学医学部十全同窓会長、山本博理事、金子周一医薬保健学域長、堀修医薬保健学総合研究科長、中村裕之先進予防医学研究科長も加わり医学類門柱除幕をおこなった。この後、部分的に完成された遊歩道を通り、附属病院正面に会場を移して、附属病院華僑整備事業完成式をおこなった。このころより、梅雨の合間の晴天となった天気は、うなぎのぼりの気温の上昇を示し三十七度に達し、全国一を記録した。

蒲田敏文病院長の式辞の後、山崎光悦学長、竹中博康副知事、細田大造副市長、上田博石川県医師会副会長、安田健二金沢市医師会長、山本博理事、蒲田敏文病院長による附属病院門柱テープカットがおこなわれた。

十二時四十五分、無事式典は終了し参加者は猛暑を避け、医学類教育棟大多目的室へ移動し、医学類・附属病院・十全同窓会合同懇親会が催された。

懇親会に先立ち、山崎光悦学長から中村信一十全同窓会会長に今回の医学類プロムナード建設への寄附に対する感謝状が授与された。懇親会には学類・附属病院関係者や、十全同窓会会員のみで無く、長期の工事でご不便をおかけした地元の方がたも参加して、旧医学部、病院の回顧談にはながさいた。最後に、工事の完成を祝い、小立野地区の発展を記して散開となった。(大井 章史 記)

平成二十七年年度決算報告ならびに
平成二十八年年度予算について

平成二十七年年度決算

表1に一般会計の決算書を示します。会費収入は、名簿改訂年の効果か、見込み額に達しました。支出では、各支部総会への参加、本学総会への参加支部が増えたため旅費が増額しました。補助費は記念館整備が必要とされなかった分減少となりました。支部総会開催が増えたため、支部への補助金額も増額しました。予備費からはアルバイト代を支出しました。

全体としては会費収入増で余剰金が出たため、基金への繰り込みを実行しました。付随する特別会計では、十全同窓会基金会計収入は、一般会計からの繰り込み、資産運用で得た利息のみです。金沢大学医学部創立百五十周年記念事業のプロムナード整備等へ四千万円、記念館展示室改修等へ二千万円の寄附を実行しました。名簿作成会計では、名簿作成にかかった

諸経費を支払い、免除会員の先生方からの賛助が収入となっています。また、高柳奨学金は、奨学生の採用がありませんでした(表2-5参照)。以上の決算報告に対して高柳監査理事から会計監査報告がなされ承認されました。

平成二十八年年度予算

会費収入は努力目標を計上しました。現実には、ここ数年間会費納入率は五〇%に満たない状態が続いています。さらに若い世代の入会率の低下が著しく、長期低落傾向を示しています。新規卒業生の入会率を増加させることは、会費納入率のアップとともに今後最大の課題であります。支出は会員情報管理システムに二百五十万円、学生課外活動や図書館などの課外活動・整備補助、事務費は例年通りの予算を計上しました。基金への繰込みに関しては会費の収入率が回復し、一般会計が軌道にのるまで調整した額としました。名簿作成会計では、名簿作成費を支払います。

(会計担当 谷内江 昭宏 記)

会計監査報告書	
平成27年度	金沢大学医学部十全同窓会会計
	金沢大学医学部十全同窓会基金会計
	十全同窓会会員名簿作成会計
	高柳奨学金会計
上記会計科目報告の収入および支出に関し、帳簿および証拠書類に間違いなく、現在高についても相違ないことを確認した。	
平成28年2月18日	
監事	高橋英樹
監事	森 記
監事	ヤ 尼 具 二

(表1) 平成27年度決算書

自 平成27年 1月 1日
至 平成27年12月31日

収 入				支 出			
科 目	予算 (円)	決算 (円)	摘 要	科 目	予算 (円)	決算 (円)	摘 要
前年度繰越金	1,491,654	1,491,654		事 業 費	5,531,728	5,377,053	会報印刷製本代 2,506,140 会報・アカンサス発送代・理事会関係発送 1,636,564 宛送用封筒代・会費払い込み用紙 331,740 会報宛送封入作業 年3回 180,781 アカンサス印刷代 44,100 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 卒前研修支援 (SP 研修会支援) 60,000 学生課外活動支援 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) 217,728 @ 2,268 × 96 本 ホームページメンテナンス (2回/年) 0 ホームページ情報更新 (12回/年) 0
会 費 収 入	11,592,000	14,168,000	平成 27 年度会費 4,000 円× 2174 人 過年度分 614 人 平成 27 年度以降 56 人 準会員会費 6,000 円× 89 人 5,000 円× 5 人	旅 費	1,350,000	1,380,640	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費 1,380,640 会報取材旅費等
雑 収 入	0	0		会 議 費	450,000	456,924	総会、理事会、会報編集委員会、反省会 456,924
				慶 弔 費	100,000	106,600	弔電・生花 106,600
				補 助 費	520,000	540,000	記念館展示室整備 0 図書館医学部分館整備補助 300,000 学生課外活動補助 (ACLS) 50,000 医学展補助 170,000 Live Aid Kanazawa 0 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金 20,000
				事 務 費	3,650,000	3,375,812	会費込料金、プリンター修理等一式、墨紙・トナー、 通信費、証明書発行手数料、文具、郵便手数料 1,025,812 人件費 2,350,000
				雑 費	0	0	
				支部への補助費	500,000	570,000	11 件 570,000
				基金への繰込み	0	1,500,000	1,500,000
				予 備 費	981,926	572,017	アルバイト代等 572,017
計	¥13,083,654	¥15,659,654		繰 越 金		1,780,608	
				計	¥13,083,654	¥15,659,654	

(表2) 十全同窓会基金会計報告書

自 平成27年 1月 1日
至 平成27年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
前年度繰越金	112,213,008		寄 附	40,000,000	金沢大学医学部創立150周年記念事業 (プロムナード整備等)
繰 入 金	1,500,000		寄 附	20,000,000	金沢大学医学部創立150周年記念事業 (記念館展示室改修等)
利 息	175,798	利付国債 (第118回・第336回)			
計	113,888,806		計	60,000,000	残高 ¥53,888,806

(表3) 十全同窓会会員名簿作成会計報告書

自 平成27年 1月 1日
至 平成27年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
繰 越 金	1,645,562		事 務 費	374,872	払込手数料、名簿掲載確認届・会員情報変更確認文 章印刷費
協 賛 金	3,615,000	免除会員協力@5,000×723件	通 信 費	2,155,364	郵便料、名簿送送料、名簿学年担当調査費
			名 簿 作 成 費	843,000	編集委員通信費・学年担当謝礼 (図書カード)
計	5,260,562		計	3,373,236	残高 ¥1,887,326

(表4) 高柳奨学会会計報告書

自 平成27年 1月 1日
至 平成27年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
前年度繰越金	5,439,410		奨 学 金	0	
利 息	599	定期預金利息			
計	5,440,009		計	0	残高 ¥5,440,009

(表5) 平成28年度予算書

自 平成28年 1月 1日
至 平成28年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
前年度繰越金	1,780,608		事 業 費	8,200,892	会報印刷製本代 2,650,000 会報・アカンサス発送代・理事会関係発送 1,700,000 発送用封筒代・会費払い込み用紙 350,000 会報発送封入作業 年3回 180,000 アカンサス印刷代 50,000 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 卒前研修支援 (SP 研修会支援) 50,000 学生課外活動支援 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) 269,892 @ 2,268 × 119 本 会員情報管理システム作成 2,500,000 ホームページ会員情報サイト管理 51,000
会 費 取 入	12,292,000	平成28年度会費 4,000 円× 1800 人 7,200,000 過年度分 4,000,000 平成27年度以降 56 人 400,000 準会員会費 6,000 円× 89 人 672,000 5,000 円× 5 人 20,000	旅 費	1,400,000	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費 1,400,000 会報取材旅費等
基金より繰入	2,500,000		会 議 費	480,000	総会、理事会、会報編集委員会、反省会 456,924
			慶 弔 費	100,000	弔電・生花 106,600
			補 助 費	570,000	記念館展示室整備 100,000 図書館医学部分館整備補助 300,000 学生課外活動補助 (ACLS) 100,000 医学展補助 50,000 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金 20,000
			事 務 費	3,450,000	会費払込料金、プリンター修理等一式・感光体・トナー、通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料 1,100,000
			雑 費		人件費 2,350,000
			支部への補助費	600,000	11 件 600,000
			基金への繰込み	0	
			予 備 費	1,771,716	アルバイト代等
計	¥16,572,608		繰 越 金		
計	¥16,572,608		計	¥16,572,608	

(表6) 平成28年度 十全同窓会基金会計 予算

自 平成28年 1月 1日
至 平成28年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
前年度繰越金	53,888,806			2,500,000	一般会計へ繰り入れ
利 息	175,000	利付国債 (第118回・第336回)			
計	¥54,063,806		計	2,500,000	残高 ¥51,563,806

(表7) 平成28年度 十全同窓会名簿作成会計 予算

自 平成28年 1月 1日
至 平成28年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
繰 越 金	1,887,326		事 務 費	100,000	払込手数料
協 賛 金	250,000	免除会員協力@ 5,000 × 50 件	通 信 費	300,000	郵便料、名簿発送料
広 告 料	3,503,520	福田商店より	議 費	0	編集委員通信費
			名 簿 作 成 費	4,646,160	名簿
			名 簿 作 成 費	183,168	訂正シール
計	¥5,640,846		計	¥5,229,328	残高 ¥411,518

(表8) 平成28年度 高柳奨学会計 予算

自 平成28年 1月 1日
至 平成28年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
前年度繰越金	5,440,009		奨 学 金	225,000	奨学生 1 名 ¥25,000 × 9 ヶ月 (4月—12月)
利 息	599	定期預金利息			
計	¥5,440,608		計	¥225,000	残高 ¥5,215,608

教授就任講演

視床下部による肝糖産生の調節とその異常の解明

代謝生理学 井上 啓

視床下部は、肝臓・骨格筋・脂肪組織といった古典的インスリン標的臓器の糖代謝調節を統括することで、個体レベルの糖代謝恒常性維持に貢献している。肝臓が食後糖利用・空腹時糖産生の両者に中心的な役割を果たすことから、特に、視床下部と肝臓とのクロストークは、糖代謝恒常性維持に不可欠と考えられている。実際には、視床下部が、ホルモンや栄養素などの血中レベルの変化や自律神経からの求心性神経情報を感知し、遠心性に迷走神経を介して、肝糖産生を調節するメカニズムの存在が明らかにされている。

我々の研究室では、糖代謝恒常性維持とその破綻のメカニズムの理解を目的として、特に、インスリンをモデルとして、視床下部による肝糖産生制御の分子メカニズムとその重要性の解明に取り組んできた。糖代謝恒常性の最重要因子であるインスリンも、直接作用とともに、視床下部を介した間接作用により、肝糖代謝を調節している。インスリンは、視床下部PI-3キナーゼ依存性のATP依存性Kチャネルの活性化を介し、迷走神経活動を抑制し、肝糖新生系酵素の遺伝子発現を減少させ、糖産生を低下させる。このような視床下部・肝臓クロストークの糖代謝恒常性維持における重要性は、中枢神経インスリン受容体欠損マウス

(NIRKO) が肝糖産生増加・インスリン抵抗性を呈する事や、ヒトで鼻腔内インスリン投与により肝糖産生が減少する事などから、明らかにされている。

我々は、視床下部インスリン作用の肝臓における作用分子が、転写因子STAT3であることを見出し、肝糖新生系酵素の遺伝子転写制御には、FOXO1やCREBなど様々な転写因子が関与しているが、炎症性サイトカインIL-6などで活性化される転写因子STAT3も、遺伝子発現プロモーターに直接結合し、肝糖新生系酵素の遺伝子発現を減少させる。グルコース負荷後に、肝臓STAT3は活性化され、肝糖新生系酵素の発現減少を引き起こすが、一方で肝臓STAT3欠損マウスでは、このような糖新生系酵素の発現減少が障害され、インスリン抵抗性を呈する。視床下部インスリン作用による肝臓STAT3活性化は、クッパー細胞からのIL-6分泌に依存している。迷走神経は、α7型ニコチン型アセチルコリン受容体を介して、クッパー細胞からのIL-6分泌を抑制しており、視床下部インスリン作用により迷走神経活動が減少すると、クッパー細胞IL-6分泌が増加し、パラクラインに肝細胞に作用し、肝細胞STAT3を活性化(図)。

インスリン以外にもレプチンやグルカ

ゴンなどのホルモンも視床下部に作用し、肝糖代謝を調節することが報告されている。種々のホルモン以外に、食事摂取により血中レベルが変化するアミノ酸によっても、視床下部を介した肝臓応答は惹起される。蛋白食材の摂取により、肝臓STAT3は活性化されるが、特にヒスタジン投与では、後部視床下部のヒスタミン含量の増加に伴う視床下部ヒスタミン作用の増強が、迷走神経を介した肝糖産生抑制を引き起こすことを見出している。アミノ酸以外にも、グルコースや脂肪酸などを視床下部が感知し、肝糖産生を調節するという報告がなされており、視床下部が個体レベルでのエネルギーセンサーとして、肝糖代謝を調節し、個体糖代謝恒常性を維持していることが示唆される。

肥満・インスリン抵抗性では、視床下部性の肝糖産生調節作用が障害されることが知られている。実際に、我々の検討においても、肥

満・インスリン抵抗性状態では、脳室内インスリン投与による迷走神経活動の抑制作用が認められないことを確認している。肥満・インスリン抵抗性における肝糖産生増加と、視床下部・肝臓クロストークの破綻が関連するのかもしれない。個体のエネルギー状態の変動を視床下部が感知し、自律神経・炎症調節を介して、代謝制御を行うという視床下部・肝臓クロストークのメカニズムの障害は、肥満・インスリン抵抗性が糖尿病のみならず、高血圧・非アルコール性脂肪肝炎・癌といった多彩な病態と関連することを説明しうのかもしれない。今後、視床下部と肝臓クロストークのさらなる解明を進めていきたいと考えている。

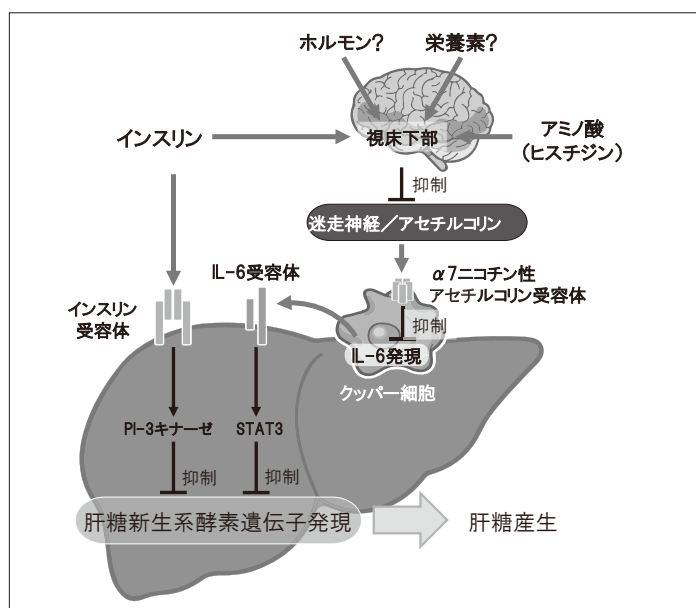


図) 視床下部が迷走神経を介して、糖産生を制御する仕組み (Kimura K, et al. Cell Rep. 2016. 14:2362-74. より一部改変)

重症患者におけるより良い鎮痛・鎮静を目指して

麻酔・集中治療医学 谷口 巧

麻酔・集中治療医学は、手術における麻酔管理を中心として、患者が手術に耐えることが出来るかどうかを判断、治療を行ったり、緊急時の蘇生を行い手術に備える手術前管理と、大手術の術後管理、重症患者の全身管理を行う、いわば周術期管理を行う分野です。患者管理は術前から合併症を持てば持つほど、また手術がより高度になり大きくなればなるほど集中治療室（ICU）にて行います。ICUが患者にとって居心地が良く、快適であればいいのですが、決して良い環境とは言えず、さらに、ICUに入室する患者は疾患のほかにも様々なストレスを受けています。侵襲刺激、例えば、術後状態や外傷後、また、種々のカテーテルやドレーン管理といったストレスや、精神的ストレス、例えば挿管して人工呼吸管理するに伴う言葉の障害や体幹抑制することに伴う行動の障害、さらに家族との別離、将来の不安といったストレス、これらのストレスが重なり合って患者の状態を悪化させる要因になり得ます。患者に様々なストレスを増長させないためにも、われわれは何らかの手段を施す必要があります。鎮痛、鎮静を適切に行う必要があります。

鎮痛・鎮静は適切に行えば患者のストレスは軽減でき、患者の病態を改善させることが可能になります。しかしながら、

不適切な鎮静、鎮痛をすることにより、患者の状態が把握できなくなったり、循環、呼吸状態に悪影響を及ぼしたり、さらに人工呼吸器関連肺炎といった合併症が増えることも事実です。最悪の場合、死に至らしめる場合もありますし、不適切な鎮痛・鎮静が患者の予後に悪影響を及ぼす報告も出てきています。周術期管理に携わる者としては、患者に様々な苦痛を与えず、かつ合併症が少ない鎮痛鎮静を常に考える必要があります。現在、重症患者における鎮痛・鎮静は、循環、呼吸、体液、栄養管理とともに主要な管理の一項目になってきています。

この鎮痛・鎮静に対する治療に関して、平成二十五年に欧米で発表されたPADガイドライン、日本では平成二十六年に発表されたJPADガイドラインにより一定の見解が得られ、われわれには受け入れやすく使いやすいガイドラインが作成されました。しかしながら、現在有効に活用されているとは考えにくく、その一因として、スタッフ間における見解の相違および知識の違い、患者に対する接し方の違い等によると考えられています。また、集中治療を行う医師側の数が少ないことも理由に挙げられています。

鎮静に関しては、鎮静薬の理想は、周囲に無関心で、暴れられたり、カテーテルやチューブを自己抜管、自己抜去され

ることがない、呼びかければ応答してくれる、循環、呼吸状態に影響を及ぼさない、日内変動に影響を及ぼさない、中止すると直ちに覚醒することが挙げられています。これらの条件をすべてかなえる薬剤は見当たりません。現在、個々の鎮静薬の長所と短所を考慮しつつ選択、使用しています。われわれは、現在使用している鎮静薬の中でプロポフォールとデクスメトミジンに焦点を当てて、基礎研究ならびに臨床研究を行っています。

例えば、重症敗血症においてこれらの鎮静薬がどう影響を及ぼすのか？ ショック状態の際の鎮静にこれらの鎮静薬を使用しても良いのか？ といった疑問に関して、動物を用いたモデルにおいて臨床で生じているショック状態下での鎮静薬の影響を検討しています。また、臨床においては、様々な重症患者において、最適な鎮静薬の選択と適切な量の判定を行うべく検討を行っております。実際、臨床においては、心臓

血管手術後の鎮静薬として用いているデクスメトミジンの有用性を検討し、発表してきております。しかしながら、まだ不明な点が多く、これから益々発展していく分野です。

今後も手術麻酔、集中治療といった臨床、周術期管理をメインに行いながら、患者にとって有用な新しい検査法の評価および新しい治療法の開発を行っていきたいと思います。今後とも御指導を賜りますようしく願います。



金沢大学附属病院 集中治療室
平成 28 年 7 月 1 日に特定集中治療加算Ⅱ（スーパー ICU）を取得しました

胆管に魅せられた四半世紀の研究史

人体病理学 原田 憲一

私は金沢大学医学部三年生の時、夏休みを利用したワークショップで病理学教室（中沼教室）に足を踏み入れるようになり、そのまま病理学専攻の大学院へ入学し、私の研究生活が始まった。当初より原発性胆汁性肝硬変（胆管炎）（PBC）を研究対象として、胆管炎に特化した研究を行ってきたが、教授就任後は炎症性疾患よりも肝胆道系腫瘍のニーズに応えるべく幅広い研究を開始している。本講演では導管上皮の病理について胆管細胞および胆道系炎症性疾患を対象として紹介する。上皮は外界と境するための生体防御器官であり、腺組織では粘液産生等による高度に専門化された器官を構成するが、導管と称される器官は軽視されてきた。肝臓を構成する胆管も単なる胆汁排泄の導管と長らく考えられてきたが、PBCや胆道閉鎖症などの胆道系疾患では胆管が選択的に障害され、これらの病因・病態形成に細菌やウイルス感染が想定されている。私は上皮としての胆管の特性を検討するため胆管細胞の培養に着手したが、ゲツシ動物とヒト由来の胆管細胞は細胞死の誘導やサイトカイン産生等の点で大きく異なることを確認した。したがって、*in vivo*の胆管や胆管病変を最も正確に模倣できる不活化操作をしないヒト胆管細胞を用いた検討を行い、ヒト胆管細胞は種々の液性因子の産生能



左より原田、常山先生（現 徳島大学教授）、Gershwin 先生（原田、常山先生の留学先 UC Davis 教授）、中沼名誉教授。20 年前撮影

を有し TCR 様受容体（TLR）や MHC class II の発現などの自然免疫および獲得免疫に関与することが明らかとなった。特に TLR を介した自然免疫応答にて、細菌やウイルスなどの微生物種に準じた抗菌ペプチドやサイトカイン、ケモカイン産生を誘導し、マクロファージなどの免疫担当細胞の助けを借りることなく適切な感染防御機構が作動する。また、細菌に対してはトランスが誘導され、エンドトキシンショック等の過剰な自然免

疫応答は回避されるが、TLR を介した免疫応答にはトランス誘導機能はなく、二本鎖 RNA ウイルス等の TLR3 リガンドに対する自然免疫応答は完全に微生物が排除されるまで持続し、胆管細胞は自らのアポトーシスを誘導するが、細胞死から逃れた細胞は上皮間葉転換（EMT）による非上皮系細胞として生存し続ける。二本鎖 RNA ウイルスであるレオウイルス・ロタウイルス感染が想定されている胆道閉鎖症の胆管傷害および硬化性変化を説明しうる所見である。このように導管である胆管は単なる炎症の場を提供するだけでなく、胆管細胞自らが積極的に免疫応答に加担することがわかってきた。また、近年胆管細胞におけるエネルギー代謝についても注目している。肝細胞でのエネルギー代謝はエネルギー産生臓器としての肝臓の重要な役割を担うが、胆管細胞における代謝については生体への直接的影響は皆無であろう。しかし、PBC で出現するミトコンドリア抗体の対応抗原はミトコンドリア呼吸酵素群のピルビン酸脱水素酵素等である。私はヒト胆管細胞を用いた検討にて、軽い飢餓状態にある胆管細胞はピルビン酸脱水素酵素活性の低下を介して解糖系から脂肪酸代謝系へのエネルギー代謝が偏位し、ミトコンドリア内の酸化ストレスの増強、さらにはアポトーシス刺

激に対する感受性亢進を来す。PBC の障害胆管に見られるエネルギー代謝を模倣する *in vitro* 系であり、胆管障害抑止への治療戦略を模索するうえでのモデルと考えている。古典的な病理学にとどまらず、bench-to-bedside に直結しうる研究をさらに発展させていく所存です。



Gores 先生



故 Scheuer 先生

お陰様でいろいろな先生方とお目にかかれました

受賞

第一回日本サービス大賞
総務大臣賞受賞

恵寿総合病院

恵寿総合病院が提供する「恵寿式」地域包括ヘルスケアサービス」が、平成二十八年六月「医療分野におけるICT利活用の革新的サービス」として「第一回日本サービス大賞総務大臣賞」を受賞しました。「日本サービス大賞」は安倍晋三総理の肝煎りで制定された、「優れたサービスをつくり届けるしくみ」を表彰する制度です。

受賞理由として、質の高いサービスの実現に向けて、「医療・介護統合電子カルテ」を全国に先駆けて構築したこと、お客さま（患者さん・利用者さん）が医療・介護といった制度・施設の違いを意識することなく、連続したサービスを受けられることが挙げられます。このサービス実現のために重要となるポイントは、三つの「ワン」（ワンコール・ワンストップ・ワンファクト）です。

ワンコール…「恵寿グループ」のすべてのサービスが、サービスセンターへの電話一本で提供されます。

ワンストップ…Web受付や自動応答ではなく、サービスセンタースタッフが窓口となり、すべてのサービスをつなぎます。

ワンファクト…お客さまの情報は「統合電子カルテ」で一元管理され、恵寿グループのすべての施設のスタッフが共有し、境目のないサービスを提供します。

今回の応募総数は八五三社であり、その中から総理大臣賞、総務大臣賞を初め計三十一件が選ばれました。ちなみに総理大臣賞はJR九州「ななつ星in九州」という大物でありました。

(山本 健 記)

第十二回金沢大学十全医学賞

金沢大学医薬保健研究域医学系
泌尿器集学的治療学・国際がん治療学

泉 浩二（平成十三年卒業）

この度、「前立腺癌の浸潤・転移におけるケモカインの役割の解明と治療およびバイオマーカーへの応用」というテーマで、第十二回金沢大学十全医学賞を賜りましたこと大変光栄に存じます。

前立腺癌の進展にはアンドロゲンが重要な役割を果たしていますが、このシグナルの活性化が癌細胞の増殖を促進したり、逆にこのシグナルの抑制が癌細胞の動きを活発にしたりします。私たちのグループは、ケモカインCCL2がアンドロゲンシグナル抑制下に分泌され、癌細胞の動きを活発にすることを明らかにしました。さらに、分泌されたCCL2は腫瘍随伴性マクロファージという癌を悪化させる免疫細胞を惹きつけ、ますます癌細胞の動きを活発にし、転移を促進させていることも明らかにしました。前立腺癌患者では血中CCL2が高いほど予後が悪いこともわかり、前立腺特異抗原と同様に、CCL2が前立腺癌のバイオマーカーとなる可能性もあると考えています。前立腺癌では、発癌から転移に至るまでCCL2以外にも多くのケモカイン

ンが関連している可能性が高く、今後はその詳細な分子機構の全貌を解明し新たな治療法の開発に繋がっていきたいと考えています。

今回の受賞にあたり、「指導を賜りました先生方に心より感謝申し上げます。また十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

第十四回 高安賞

高安賞は平成十五年、本学昭和三十九年卒業の臼井澄先生のご篤志により設けられた賞で、優秀な学位論文を発表した博士課程修了者に贈られる。選考は、第一次審査会（主査および副査）と専攻長等から構成される選考委員会の二段階で行われ、医学系運営委員会と博士課程委員会の議を経て決定される。

平成二十八年度受賞者には、次の三名が選ばれた。

最優秀論文賞 劉 光焱

分子遺伝学（生化学第一）

TGF- β suppression of HBV RNA through AID-dependent recruitment of an RNA exosome complex (TGF- β is AID依存性にRNAデグラトゾームをリクルートする事でB型肝炎ウイルスのRNAを低下させる)。Plos Pathogens 平成二十七年掲載
優秀論文賞 安藝 翔

血管分子生理学（生理学第一）
Phosphatidylinositol 3-kinase class II α -isoform PI3K-C2 α is required for transforming growth

factor β -induced Smad signaling in endothelial cells

(血管内皮細胞においてクラスII型PI3K-C2 α はTGF β /Smadシグナル伝達系に必須である) Journal of Biological Chemistry 平成二十七年掲載

優秀論文賞 笠田 篤郎

がん幹細胞学（遺伝子・染色体構築）

Loss of mTOR complex 1 induces developmental blockage in early T-lymphopoiesis and eradicates T-cell acute lymphoblastic leukemia cells (mTOR複合体1の喪失は、Tリンパ球初期分化の停止を誘導するとともに、T細胞性急性リンパ芽球性白血病細胞の根絶に寄与する) Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America 第一一一巻第一〇号 三八〇五頁〜三八一〇頁 平成二十六年掲載
平成二十八年七月二日(土)開催の金沢大学医学部十全同窓会総会で堀修医薬保健学総合研究科長から各受賞者に賞状と記念盾および副賞賞金が授与された。

(堀 修 記)

第十二回黒川良安賞およびスロイス賞

医学類の成績優秀学生を顕彰する黒川良安賞およびスロイス賞の授与は、今年で十二回目を迎えました。両賞は、医王保護者の会の支援を受けています。

第十二回黒川良安賞は、平成二十七年卒業生の成績優秀者上位三名、洞庭薬子さん、大島由さん、加治貴彰さんに対して、平成二十八年三月二十二日の学位

授与式の席上で授与されました。

また、スロイス賞は、三年次を修了した学生のうちから、成績優秀者上位三名、北山祥平さん、谷村純さん、曾根涉さんに対して、平成二十八年五月二十八日に開催された医王保護者の会総会の席上で、授与されました。

(多久和 陽 記)

学会報告等

第九十一回 日本結核病学会総会

平成二十八年五月二十六日～二十七日、石川県立音楽堂等を会場として第九十一回日本結核病学会総会を開催致しました。金沢では三回目（第十七回総会、昭和十四年、金沢市 大里俊吾教授、第二十五回総会日置睦奥夫教授）となりますが六十六年ぶりです。我が国の結核病罹患率は緩やかに減少を続けていますが、呼応するかのような卒前の結核学部教育の希薄化が卒後の医療従事者の認識低下につながり、国民の結核脅威への関心度も低下しています。そして、結核抗酸菌症患者の地域偏在と医師職の診療科偏在・地域偏在というねじれ現状は改善されそうにありません。結核・抗酸菌症診療体制の効率化が求められます。そこで、本学会のテーマを「医療スタッフの抗酸菌症卒後教育―よりよいチーム医療を求めて―」としました。総計三三三演題が発表されました。招請講演はオレゴン大学のDM.Lewinson教



授が「Advanced insight into cellular immunology of Mycobacterium tuberculosis」と結核免疫学の最新の進歩を講演され、キルギス共和国科学アカデミー事務総長のAA.Aldashev教授（本学会直前に病に倒れ、キルギス呼吸器学会理事長が急きょ交代）が「Lesson from the TB medical strategy of USSR」のテーマで旧ソ連邦の結核診療の光と影とを講演されました。特別講演「高齢者結核の特徴と治療上の問題点」、教育特別講演「肺結核の画像診断」やシンポジウム「結核・抗酸菌感染症教育はいかにすべきか、いかにあるべきか」、「IGRAの有用性」、「LTBI診断と治療適応を巡って」、「認定医・指導医・エキスパートの役割」、「地域医療における抗酸菌症患者ケアの問題点」「診断・治療に影響する因子への対応と多職種連携」などは関心度が高く満席の会場も見られました。会場には医師・研修医、保健師、看護

師、薬剤師、臨床検査技師などチーム医療には欠かせない職種の方が一四〇〇名程参加しました。さらに、代議員会懇親会（しいのき迎賓館）と全体懇親会（ホテル日航金沢）では金沢ならではの食べ物と能登ワインや能登北部酒造メーカーの銘酒を堪能していただきました。

若手医療者向けに（卒後）抗酸菌症エキスパート集中セミナーを二日間午前・午後に行った会場は立見席が出るほど盛況でテキストブックを急きょ増版しました。さらに、最終日午後には第二三九回ICD (Infection control doctor) 講習

平成二十八年度十全医学会総会ならびに「金沢大学十全医学会・千葉大学・金沢大学・長崎大学 先進予防共同大学院院合同シンポジウム」の報告

去る六月二十一日（火）に金沢大学十全講堂において、平成二十八年度十全医学会総会ならびに「金沢大学十全医学会千葉大学・金沢大学・長崎大学 先進予防共同大学院院合同シンポジウム」が開催されました。

総会では、まず庶務担当理事の中村裕之先生による庶務報告、会計担当理事の堀修先生による会計報告、編集担当理事の井関尚一先生による編集報告が行われ、その内容が承認されました。引き続き、平成二十七年（第十二回）十全医学賞・十全医学会奨励賞の授与式ならびに十全医学賞受賞記念講演が行われました。今回、十全医学賞は金沢大学医薬保健研究域医学系泌尿器集学的治療学・国際がん治療学特任助教の泉浩二先生、十全医学会奨励賞は公立学校共済組合北陸中央病院内科の大家理恵先生がそれぞれ受賞さ

会を「ICDのための抗酸菌学講座」のタイトルで開催しました。また、石川県民向けの公開セミナー（参加費無料）では「健康と伝統文化を楽しむ」を最近の感染症、肺の健康、輪島塗に焦点を当てて判りやすく講演していただきました。

次世代医療者へ抗酸菌症研究の進歩と診療の進歩を確実につなげていける総会であつたと期待します。最後に、本学術総会開催・運営に多大なご支援をいただきました金沢大学十全医学会はじめ関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

(石崎 武志 記)

れました。泉先生の受賞研究課題名は、「前立腺癌の浸潤・転移におけるケモカインの役割の解明と治療およびバイオマーカーへの応用」で、受賞記念講演ではアンドロゲン受容体とCCL2ケモカインを介した去勢抵抗性前立腺癌における癌進展メカニズムの解明に焦点をあてた最新の研究成果が紹介されました。また、大家先生の受賞研究課題名は、「2型糖尿病の一次予防に関する臨床疫学研究」で、金沢大学十全医学会雑誌の第二四巻第三号に掲載されていますので、是非ご覧いただければ幸いです。

また、本年度は合同シンポジウムの為、先進予防医学研究科長である中村裕之先生、当会の学術集会担当理事和田隆志先生、河崎洋志先生、華山力成先生が中心となって、そのテーマを「先進的な予防医学における共同研究と今後の人材育成」



とし、外部講師として現在内外で八面六臂の活躍を繰り広げておられる森千里先生（千葉大学大学院医学研究環境生命医学教授／千葉大学予防医学センター長）、川上純先生（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科先進予防医学講座リウマチ膠原病内科学分野教授）の二名の先生方、特別講演に杉本八郎先生（同志社大学脳科学研究科・神経疾患研究センターチエア・プロフェッサー）をお招きし、さらに、学内講師として中村裕之先生（金沢大学大学院先進予防医学研究科長／環境生態医学・公衆衛生学教授）、篁俊成先生（金沢大学大学院先進予防医学研究科包括代謝学分野／金沢大学大学院医学系研究科内分泌・代謝内科学分野教授）にも加わっていただき、それぞれの先生方の視点から見た予防医学の先駆的な研究成果の一端や人材の育成方法、さらには創業に対する「熱い思い（passion）」を講演していただきました。今回の合同シンポジウムは、三時間半にも及ぶ長丁場でありましたが、それでも最後まで質義応答が活発に行われ、参加者の皆様方の予防医学に対する関心の高さに驚かされた次第です。

最後になりましたが、本学術集会の開催

に向けてご尽力を賜りました関係者各位ならびに学術集会に参加していただきました会員の皆様方に心より感謝申し上げます。
（十全医学协会会长 太田 哲生 記）

第三十回日本腹部放射線学会 The 30th Annual Meeting of Japanese Society of Abdominal Radiology

金沢大学大学院

医薬保健学総合研究科放射線科学

蒲田 敏文

二〇一六年（平成二十八年）六月二十四日（金）、二十五日（土）、石川県立音楽堂において、第三十回日本腹部放射線学会を開催させていただきました。

本学会は平成二年に日本腹部放射線研究会として発足し、平成二十六年の第二十八回大会から現在の腹部放射線学会に変更となっております。金沢の地では平成七年の第九回大会を松井修大会長のもと、開催させていただいており、今回は二十六年ぶりであり、三十回の記念大会でもありました。

大会中は梅雨の時期ということもあり、あいにくの雨にもかかわらず、金沢人気や新幹線効果もあり全国より画像診断を中心に行っている放射線科医約五百名の参加がありました。演題数も口演五十九題（内、七演題はInternational sessionとして英語での発表と討論）、ポスター発表九十一題となりました。また、二つの基調講演、二つのランチョンセミナー、イブニングセミナー、モーニングセミナーを企画し、三十回の記念大会として、特別講演二つとパイプオルガ

ン演奏を企画させていただきました。初日の夜は例年のごとくサッカー大会も開催いたしました。基調講演はいずれも本学のご出身である二名の先生にご講演を賜りました。ひとりは神戸大学病理ネットワーク学教授の全陽先生に『胆道系の乳頭状・嚢胞性腫瘍』ということで、胆道系の腫瘍について最新の話題についてご講演いただき、腹部放射線診断を専門とする者には今後の画像診断非常に役立つ知識をご教授いただきました。二人目は富山市立富山市市民病院消化器外科部長の北川裕久先生に『新・脾臓取り扱い規約（第七版）における画像診断—造影CTによる「切除可能性分類」と組織所見—』ということでご自身が中心となつて作成なさつて改訂された最新版の取扱い規約に基づいて病理と画像の詳細な対比検討についてご講演をいただき、脾臓治療方針決定における詳細な画像診断の可能性と重要性をご教授いただきました。さらに、今回は三十回の記念大会として腹部放射線研究会・学会について二名の先生に

これまでの本会の歴史についてご講演いただきました。骨盤領域の画像診断については総合南東北病院放射線科画像センターの宗近宏次先生に、上腹部画像診断領域については金沢大学名誉教授、北陸画像診断支援センター理事長の松井修先生にご講演いただきました。一般演題、ポスター発表ともに活発な議論がなされ、非常に有意義な大会となりました。ポスター会場のわきでは金沢の銘菓とともに

抹茶が振る舞われ、会の息抜きに、また脳への糖分とカフェイン補給に役立ったのではないのでしょうか。さらに、大会初日の夕には恒例となっている画像診断のクイズ症例の解答公開があり、音楽堂交流ホールの症例展示ブース周囲には画像診断の猛者たちが集つて議論を深めておりました。交流ホールではそれに引き続いて情報交換会が行われ、jazzの演奏に耳を傾けながら会場にて振る舞われた石川の銘酒コーナーに人集りができ、画像診断の話題も相まつて五感をフルに刺激された会となったことと思っております。



最後になりましたが、本学術集會にご参加賜りました皆様、開催・運営に多大なご協力・ご賛同いただきました企業・団体各位ならびに石川県、金沢市、そして金沢大学十全医学会、金沢大学放射線科同門会の皆様方には金沢大学放射線科の医局スタッフとともに、心より深くお礼申し上げます。

(南 哲弥 記)

第七回日本脳血管・認知症学会学術大会 (VAS-COG Japan 2016)

平成二十八年(二〇一六年)八月六日(土)に金沢都ホテルにおいて、愛媛大学分子心臓血管生物・薬理学の堀内正嗣と金沢大学脳老化・神経病態学(神経内科学)の山田正仁が共同で大会長を務めさせていただき、第七回日本脳血管・認知症学会学術大会 (VAS-COG Japan 2016) を開催いたしました。平成二十二年の研究會発足以来、初めて地方都市での開催となりましたが、一般参加および招待者を併せて百六十名の参加を得て、盛會裏に学術大会を終えることができました。

今回の学術大会では、「心血管・代謝と認知症および脳アミロイドアンギオパチー」をメインテーマとし、血管性認知障害の病態解明や治療法開発に関連した教育講演、シンポジウムおよび特別講演を開催いたしました。

特別講演1では新潟大学の南野徹教授に「老化シグナルによって制御される心血管代謝ネットワーク」の題名でご講演いただきました、特別講演2として英国サウ

サンプトン大学のJames Nicoll教授に「The role of the vascular system in dementia」の題名でご講演いただきました。

シンポジウムでは心臓を含めた血管病変と代謝性疾患の認知症発症への関わりおよび脳アミロイドアンギオパチーに関する最新の知見が報告され、参加者との活発な討論が行われました。

一般演題と若手研究奨励賞(YIA)には三十七演題の応募をいただきました(うちYIAは十二演題)。VAS-COG Japan 2016で初めて行った取り組みとして、一般演題とYIAに関して口演での発表は全て取りやめ、ポスター発表では、演者による個別のプレゼンテーションは行わないこととしましたが、各カテゴリーで二名ずつのコメント



レーターをお願いし、ポスタービューイングとポスターディスカッションの時間帯で、演者および参加者とじっくり議論していただくこととしました。議論が盛り上がるか心配しましたが、ポスターの前では大変活発な議論が行われ、演者や参加者より好意的な意見をいただくことができました。また、理事の投票を元に、四演題をYIAとして選出し、懇親会において表彰させていただきました。

本学術大会の開催にあたっては愛媛大学および金沢大学の教職員のご協力をいただきました。また、皆様のご支援で実りのある学会になりましたことに深謝いたします。

(坂井 健二 記)

第四回日本アミロイドーシス 研究会学術集會

平成二十八年(二〇一六年)八月十九日(金)にKKRホテル東京において、金沢大学大学院脳老化・神経病態学(神経内科学)の山田正仁が大会長を務めさせていただき、第四回日本アミロイドーシス研究会学術集會を開催いたしました。一般参加および招待者を併せて百六十三名の参加を得て、盛會裏に学術集會を終えることができました。

今回の学術集會では、「アミロイドーシスの分子機構と新規治療への展望」をメインテーマとし、アミロイドーシスの病態解明や治療法開発に関連した教育講演、シンポジウムおよび英語によるSpecial Symposiumを開催いたしました。



Special Symposiumとは「Central nervous system involvement in patients with ATTR amyloidosis」をテーマに、熊本大学の山下太郎先生とポルトガルのCentro Hospitalar do Porto Luis F. Maia先生にご講演いただきました。

シンポジウムでは各病型におけるアミロイドーシスの分子機構に関する最新の知見およびアミロイドーシスを標的とした治療法開発の現状と今後の展望が報告され、参加者との活発な討論が行われました。

一般演題と研究奨励賞には四十六演題を応募いただきました(うち研究奨励賞は二十二演題)。日本アミロイドーシス研究会学術集會での初めての取り組みとして、一般演題と研究奨励賞応募演題に関しては口演での発表は全て取りやめ、ポスターによる発表のみとしま

した。ポスター発表では、演者による個別のプレゼンテーションは行わないこととなりましたが、各カテゴリーで二名ずつのコメンテーターをお願いし、ポスタービューイングとポスターディスカッションの時間帯で、演者および参加者として議論していただくこととしました。議論が盛り上がるか心配しましたが、コメンテーターの先生方のおかげでポスターの前では大変活発な議論が行われ、演者や参加者より好意的なご意見をいただくことができました。また、幹事の投票を元に、懇親会において四演題を研究奨励賞として表彰させていただきました。

本学術集会の開催にあたっては金沢大学の教室員のご協力をいただきました。また、皆様のご支援で実りのある学会になりましたことに感謝いたします。

(坂井 健二 記)

金沢大学関連病院長会議

平成二十八年度金沢大学関連病院長会議が平成二十七年七月二日(土)に金沢大学附属病院四階宝ホールで十五時から開催された。

山田哲司会長(石川県立中央病院院長)の挨拶の後、議長に兜正則理事(福井県勝山総合病院院長)が選出された。まず、平成二十七年年度収支決算、平成二十八年度予算が承認された。

次に役員、役員異動、金沢大学附属病院の人事異動が報告され、自己紹介ならびに挨拶が行われた。会員数は八十四、出席病院は六十三病院であった。

引き続き行われた意見交換会では、大学からは山本博病院担当理事から北陸臨床研究推進機構についての紹介があった。次いで、土屋弘行副院長より関連病院別の金沢大学病院への紹介件数について報告があった。

ブロック別の要望では、富山県からは新専門医制度に対する大学の考え、リハビリ専門医の育成、石川県からは医師の高齢化問題・若手医師の養成、専門医制度について、高度救命救急の充実の要望がなされた。福井県からは、研修医制度、研修派遣期間の長期化の要望、年単位の希望が出された。

これに対して病院長は、十九の基本診療科の新専門医制度に関しては、現在一年延期を含めて見直しを検討されており、正確な情報を得て適切に対応したいと述べられた。また、石川県から要望があったの高度救命救急の充実については、大学病院も高度救命救急センターの設置やドクターヘリの配備も含めて前向きに検討したいという返答があった。

(蒲田 敏文 記)

御遺骨返還式・合同慰霊祭

平成二十八年度の御遺骨返還式・合同慰霊祭は六月十一日(土)午前十時、十全講堂での文部科学大臣感謝状伝達式から始まりました。池端良伸総務課長による開式の辞に引き続き、多久和陽医学類

長よりご遺族おひとりおひとりに文部科学大臣感謝状が伝達され、感謝の言葉をご家族の皆様述べられました。

献体者御遺骨返還式は午前十時半か

ら、ご遺族の皆様、しらゆり会会長井沢義武様、理事長竹山雅万様をはじめとしたしらゆり会役員の方々、会員の皆様にご出席いただき、多久和陽医学類長、医学系と附属病院の教職員、学生が出席して始まりました。名誉会員二十六名のご冥福を祈って黙祷をさされた後、祭主の多久和陽医学類長が追悼の言葉を述べられました。出席者全員が壇上の御遺骨に感謝の気持ちをこめて献花をし、多久和陽医学類長から御遺骨がご遺族に返還されました。最後に学生を代表して田中智君(三年生代表)が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当者を代表して機能解剖学分野教授 尾崎紀之がお礼の言葉を申し述べました。

合同慰霊祭卯辰山墓地法要は午後一時から金沢大学医学部卯辰山墓地において、覚林寺ご住職のご読経とご講話を賜り、肅然と営まれました。ご遺族としらゆり会の皆様のご臨席を仰ぎ、多久和陽医学類長、教職員と学生が参列し焼香、参拝しました。この墓地には、明治二十年の第四高等学校医学部から現在に至るまでの、約六千名の献体者の芳名墓碑があり、本年六月に金沢大学医学系によつて新たに三十六基が建立されました。また、井沢義武しらゆり会会長のご尽力もあり、金沢市よりその整備についてご配慮をいただいています。

第百十四回合同慰霊祭は午後二時半に始まりました。祭壇には正常解剖と病理解剖に御体を捧げられた百六十九名の方芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族とご来賓、しらゆり会役員ならびに会員の皆様のご臨席を仰ぎ、多久和陽医学類長、竹村博文附属病院副病院長、医学系と附

属病院の教職員、そして学生が参列しました。黙祷の後、多久和陽医学類長が追悼の言葉を述べられ、出席者全員が献花をしました。最後に竹村博文副病院長が謝辞を述べられ、午後三時半過ぎに終了となりました。

七月七日(木)、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者盂蘭盆会法要が営まれました。多久和陽医学類長をはじめとする医学系の教職員多数の方々が参列されました。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者の冥福を祈りました。墓地法要終了後、十全同窓会が平成十四年十月に修造して下さったホルトルマン(金沢医学所教師)愛児(明治九年〜十一年歿)の墓碑にも奉拝しました。

(尾崎 紀之 記)



病院紹介

恵寿総合病院

能登半島のほぼ中央部に位置する七尾市。そのさらに中心部に位置する旧市街地に恵寿総合病院は立地しています。市の人口は約五万五千人、高齢化率は三十四%を超えています。患者さんの受診圏域は能登地域のほか、隣県の氷見市にも及んでいます。

恵寿グループは現在、『先端医療から介護・福祉まで「生きる」を応援します』というキャッチフレーズで、恵寿総合病院を中心に医療・介護・福祉・保健の総合的なヘルスケアサービスを提供しています。

グループ最大の特徴はICT（情報通信技術）を活用した情報の統合です。平成九年にオーダーリングシステムを導入して以来、物品管理や患者情報を結び付け「1患者・利用者1ID」で施設間のオンライン化を進めてきました。平成十四年には電子カルテを導入し、その後約十年をかけたすべてのグループの情報を統合し情報の質を向上させました。平成二十六年からはクラウド化し仮想大病院のような「医療・介護統合電子カルテ」が完成し、情報の一元的な管理ができるようになっていきます。これによって恵寿ヘルスケアシステムを構成する三十二の施設や事業所のどこを利用しても、途切れることのないサービス提供が可能となっています。また、いしかわ診療情報共有ネットワークによって四百を超える

病医院・施設と連携するなど、地域に開かれたシステムになっています。

情報の統合は、先進的なシステムの整備にとどまりません。既述の「医療・介護統合電子カルテ」を基礎に患者・利用者さんの利便性を高め、途切れのないサービスを提供するための窓口として、「けいじゅサービスセンター」を整備してきました。「けいじゅサービスセンター」は、コールセンター、地域連携、医療福祉相談の三部門からなります。平成十二年の介護保険開始とともに開設したコールセンターは、年中無休で医療・介護の予約や変更、問い合わせに対応し、さらにサービスの範囲を拡大しています。例えば、共有化された情報を活用し患者・利用者さんに電話をかけて受診日の確認や定期受診の勧奨を行うほか、介護記録の代行入力も担っています。代行入力により介護職員の負担が軽減され、より長い時間利用者さんに寄り添うことが可能になりました。また、記録に使う用語の統一やチェックボックス化を用い、全施設で記録の簡略化をはかりました。この「医療・介護統合電子カルテ」を土台とし、問い合わせなどのアナログ情報をコールセンターがワンコール・ワンストップでデジタル情報につなぐサービスは「恵寿式」地域包括ヘルスケアサービス」として平成二十八年六月「第一回日本サービス大賞総務大臣賞」を受賞しました。

このように「けいじゅヘルスケアシステム」は、国が進める医療・介護の連携である地域包括ケアシステムを一步先取りした仕組みです。

平成二十五年十一月に創立八十周年記念事業として完成した病院本館（写真）は、日本一海に近い立地でありながら災害に強い建物になっています。免震構造はもとより、一階床の高さを約三・五mかさ上げし、非常用発電や受変電設備、熱源設備を屋上階に、メインサーバー室を上階に設置。夜間離着陸が可能な屋上ヘリポートを設置し、患者さんの移送や物資の補給といった対策も万全です。

最後に、当院の臨床研修プログラム「家庭医療コース」を紹介いたします。米国家庭医療専門医や産婦人科専門医など多彩な指導医陣が「家族みんなの医療センター」（家庭医療科、緩和医療科、産婦人科、小児科）を中心に研修指導を行います。高度急性期医療、女性医療、緩和医療、そしてリハビリを含む在宅診療や介護系サービスを提供している「けいじゅ」だからこそできるプログラムです。

食べ物がいしく、空気がきれいで、温泉などの観光資源が充実した地域は全国至る所にあります。しかし、そのような地域で万一脳卒中や急性心筋梗塞がおこったときに、二十四時間三百六十五日緊急手術に対応できる「安心・安全」な地域は数えるほどしかありません。恵寿グループでは現在、「病院・施設の

品質の時代から地域の品質の時代へ」をモットーとし、建物・設備の充実はもちろんのこと、職員の質の向上を目指すことで「安心・安全」な地域を創出し維持したいと思っています。

（病院長 山本 健 記）



病院紹介

高岡市民病院

本院は、昭和二十六年年十月に、内科と外科の二診療科と一般病床五十床を備えた「健康保険高岡市民病院」として開設して以来、時代の要請に応じて、病院の改築や診療科の新設、病床数の変更などを重ねてまいりました。

現在では、二十二診療科、四〇一床（七対一一般病床三〇七床、HCU六床、緩和ケア病床二十床、精神五十床、結核十二床、感染六床）を有し、富山県の高岡医療圏（高岡市、射水市、氷見市）で生活されている約三十二万人の高度急性期医療を支える中核的病院として、「生命の尊重と人間愛を基本に、心がかよいあう医療を提供します。」を基本理念とし、高岡医療圏の救急医療を支え、がんや循環器疾患等を中心とした高度急性期医療、さらには自治体病院として民間医療機関では限界のある精神科疾患、結核、特殊感染症対策、災害医療といった政策的医療の提供に努めています。

診療科は、内科、循環器科、リウマチ科、精神神経科、神経内科、消化器内科、小児科、外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、胸部・血管外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、放射線科・核医学科、歯科口腔外科、麻酔科・集中治療科、病理診断科の二十二診療科に常勤医を有し、常勤医六十一名、初期研修医五名、非常勤医三十八名で安全で質の高い

医療の提供に努めています。

国が推し進める医療提供体制再編の荒波の中で、自治体病院として住民の皆様にとつてどのような医療体制が最善であるかを常に勘案し、高岡医療圏での本院の役割と立ち位置と将来を見通しながら医療提供体制の充実に努め、救急輸送病院として多くの救急車やドクターヘリを受け入れ、高岡医療圏の急性期医療を支えてきました。また、平成十九年に厚生労働省から地域がん診療連携拠点病院に指定され、平成二十二年年度から五ヶ年計画で最新医療機器を導入し診療機能を飛躍的に向上させ、高岡医療圏におけるがん医療の拠点病院として、がん医療提供体制の充実に取り組んできました。平成二十六年年度から病棟の再編に取組み、集中治療体制の機能を強化し、平成二十八年三月には富山県西部地区では初めてとなる「緩和ケア病棟」を開設しました。そして平成二十八年十月には外来化学療法室の拡充などがん医療の集約化を図ることにしております。

また、本院は、腹腔鏡手術に力を入れており県内有数の手術件数を誇っております。循環器では、心臓カテーテル検査、ステント治療などの経皮的冠動脈治療においては県下トップクラスの実績を有しており、難治性の冠動脈疾患も経皮的冠動脈治療を積極的に行い、完全血行再建を目指しています。さらには、最新鋭のレーザー装置の導入による下肢静脈瘤手術や、脊柱管狭窄症に対する低侵襲側方侵入腰椎前方固定術（XLIF）などの最先端手術も行っています。

一方、地域災害拠点病院としてDMA T（災害派遣医療チーム）二隊を有し、夜間照明・融雪装置つき屋上ヘリポート

および災害救助用車両も完備しており、関係諸機関と連携し大規模災害訓練を積極的に行って有事に備えております。

本院が急性期医療を担う中核的病院としての使命を果たし、高岡医療圏の回復期、慢性期、在宅医療を担う医療機関に対する後方支援の役割を担うことによって、地域全体で患者さんの状態に応じた切れ目のない質の高い地域医療・在宅医療が提供できる地域包括ケアシステムの推進に努めるとともに、住民の皆様方にも信頼していただける病院を目指し努力を続けております。

また高岡市は「Fort Wayne市 (Indiana州, USA)」と姉妹都市提携を結んでおり、高岡市民病院とFort Wayne市のParkview Regional Medical Center (PRMC)との医療交流の一環として、平成二十五年に研修医を含む三名が医療交流団としてPRMCを訪問し、「日米の医療制度と現状」をテーマに医療交流を行いました。平成二十七年には「がん医療」をメインテーマにがん医療に関わる本院の医師、看護師、薬剤師、および研修医が訪問し、平成二十八年秋にはPRMCの医療交流団が高岡市民病院を訪問します。今後も引き続き医療交流を重ね、本院の「医療の質と安全」を高めていきたいと考えております。

高岡市（人口約十七万人）は、富山県北西部に位置し、豊かな自然に恵まれた富山県第二の都市です。北は富山湾に面し、雨晴海岸からは海越しに三〇〇〇メートル級の立山連峰の大パノラマを見る

ことができます。古く奈良時代は伴家持に代表される越中文化発祥の地です。現在の高岡市伏木には国府がおかれていました。我が国最古の歌集である「万葉集」の代表的歌人である伴家持は天平十八年（七四六）越中守として赴任し、「万葉集」全四千五百十六首のうち越中時代五年間に詠んだ二百二十三首の歌を「万葉集」に残しております。さらに、近世は加賀二代藩主前田利長が築いた城下町として栄え、明治二十二年の市制・町村制の施行では全国最初の市の一つとなった歴史ある都市です。

十全同窓会の先生方におかれましては、引き続き本院をよろしくお願い申し上げます。そして、ぜひ風光明媚な万葉集ゆかりの地を訪れてください。

（病院長 遠山 一喜 記）



循環救急蘇生科学

沿革

平成十二年九月に、救急医学講座の開設に伴い、稲葉英夫教授が初代講座教授として就任した。稲葉英夫教授は、同年十月からは救急部と集中治療部の部長も併任された。講座、救急部、集中治療部の三部門が救急指導医のもとで合同運営され、学生教育と診療を担う運びとなった。平成十三年には、救急医学講座は金沢大学大学院医学系研究科血液情報発信学、平成二十七年には、循環救急蘇生科学と改称し、現在に至っている。現在、講座教員は教授二名、准教授二名、助教二名が所属している。

教育

学域・学類担当授業科目として、初学者ゼミ、生と死を見つめて―死生学入門―、循環器、救急医学臨床実習BSL、病院前救急医療システム、災害医療システム、救急・災害医学を稲葉英夫教授が担当している。特に、救急医学臨床実習BSLでは、救急車両に救急救命士の指導のもと同乗し、病院前救護の実習を行っている。

大学院

血液情報発信学特論、生命倫理学・研究倫理、生命倫理学・研究倫理が開講されている。研究テーマは、各種の侵襲による急性臓器障害の克服をめざし、基礎的実験や臨床研究による急性臓器障害の病態生理の解明とそれに立脚した先進的管理技術・治療技術の開発を目標にしている。一方、本講座はわが国においては立ち遅れている災害医療・病院前救急医療システムを中心と

した地域単位の効率的・効果的医療システムの構築のための地域単位の救急医療に関する疫学調査を積極的に行っている。医師に限らず、救急医療関係者（行政職員、救急隊員、救急救命士）を大学院生として受け入れている。主要な研究課題としては、1. 地域の救急医療システム評価と効果・救急医療システムの構築・院外心停止の予後に影響する因子の解明（医師による病院前救急医療システムの制御）、2. 急性臓器不全の病態生理の解明（虚血・再灌流障害微小循環障害・内皮細胞アポトーシス）、3. 病態生理に立脚した新しい管理技術・治療技術の開発（Ischemic preconditioningの応用急性血液浄化）をテーマとしている。

研究

近年発表した研究内容の一部を抜粋紹介する。

1. 前田哲生助教、竹井豊研究協力員、神蔵貴久大学院生を構成員とした稲葉英夫教授らの研究グループは、平成十九年から平成二十四年に国内で発生した約七十二万件の院外心停止データから、一般市民により目撃された心停止約十九万件のデータを抽出し、分析を行った。その結果、過疎地域や高層ビル、交通渋滞の影響で救急隊到着に時間を要す場所で発生した院外心停止例では、近くに居合わせた市民が自発的に従来どおりの人工呼吸と心臓マッサージを組み合わせた心肺蘇生を実施した場合に、脳機能良好一か月生存率（一か月後に自立した生活ができる状態で生存している割合）が他の心肺蘇生に比べ顕著に高くなることが明らかとなった。この研究は、市民に対して蘇生教育を行う立場の医療従事者に人工呼吸の重要性を再認識させるとともに、蘇生

意欲を有し質の高い人工呼吸と心臓マッサージを実施できる市民養成とそのような市民を心停止発生現場にリクルートするシステム作りの必要性を示唆する結果となった。本研究成果はヨーロッパ蘇生協会の医学雑誌「Resuscitation」オンライン版に平成二十八年六月四日（イギリス標準時間）に掲載された。

2. 田中良男研究協力員、前田哲生助教、稲葉英夫教授らの研究グループは、平成十九年から平成二十一年までに日本国内で発生した五四七二八人の院外心停止患者に関する総務省のウツタインデターを解析した。その結果、心停止を目撃したのが「患者の家族」であった場合には、自分の家族が心停止しているにも関わらず、心肺蘇生の実施率は低く、心肺蘇生の開始や一九番通報も遅れ、結果として生存率が最も低いことが明らかになった。本研究の結果より明らかとなった、「本質的に患者の家族は心肺蘇生の実施をためらう」という事実を社会全体が認識する必要があると考えられた。同時に、心停止患者の多数が自宅で発生し、その目撃者は女性と高齢者家族である場合が多いという結果に基づき、自宅が家族が心停止した場合を具体的に想定した新しいシナリオなどを用いた心肺蘇生法の講習会や通報時に通信指令員が行う心肺蘇生の口頭指導の工夫が必要である。さらには、石川県メディカル・コントロール協議会（会長…本学医薬保健研究域医学系教授 稲葉英夫）が日本で先駆けて石川県加賀市に導入したファーストレスポnder制度などの新しい試みにより、よく訓練された近隣住民が蘇生の手を家庭に差し伸べることで、救命率の

向上が可能であると考えられた。この研究成果は、欧州蘇生協議会の医学雑誌「Resuscitation」オンライン（暫定版）に平成二十六年十一月十三日（イギリス標準時間）に掲載された。

診療（臨床）

附属病院救命センター長（災害担当）である稲葉英夫教授を中心に、災害医療・救急診療を行っている。特に、石川県における病院前救急医療システムを中心とした地域単位の効率的・効果的医療システムの構築のため、平成十六年四月から稲葉英夫教授が石川県メディカル・コントロール協議会会長に就任し、以降現在に至る十二年間にわたり、医師による病院前救急医療システムの制御（メディカルコントロール）に尽力しており、その成果は、国内外で高く評価されている。また、平成二十三年三月に発生した東日本大震災に際し、災害派遣医療チーム（DMAT）を中心とした災害医療支援活動を積極的に行ったことが高く評価され、平成二十五年五月十日に厚生労働省から感謝状の授与が行われた。災害はいつ再び日本に発生するかは分からないことから、東日本大震災の教訓が生かされ、「想定外」という言葉が再度使われないような災害対応ができる様に各診療科と協力のもと尽力したいと考えている。

終わりに

平成十二年の講座開設以来、石川県における救急医学教育の普及に稲葉英夫教授以下教職員一同尽力してきたが、さらに広く大学および循環救急蘇生科学の発展に寄与したいと考えている。今後とも、十全同窓会の皆様の御指導、御鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

（後藤 由和 記）

免疫学

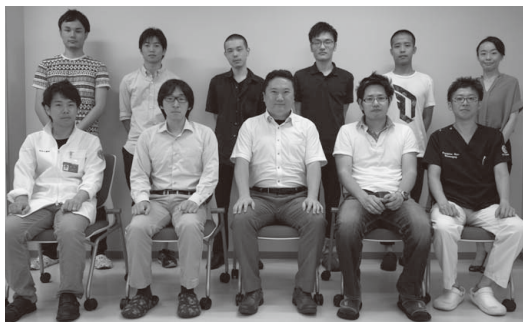
教室の沿革

本教室は昨年改組により新設されました。平成二十七年六月一日に大阪大学免疫学フロンティア研究センターの華山力成特任准教授が初代教授として着任し、助教一名、事務補佐員一名の体制で教室運営を行っております。上記スタッフに加え、特任助教一名、大学院生五名（脳神経外科、整形外科から各一名）、MR Tプログラムの医学類生五名で研究を進めております。大学院は医薬保健学総合研究科と先進予防医学研究科を兼任しております。

研究内容

本教室の中心プロジェクトとして、細胞外小胞エクソソームによる生体内情報伝達機構の研究を進めております。エクソソームは様々な細胞が分泌する直径100nm程度の膜小胞で、殆どの体液（血液や尿、髄液など）や細胞培養液中に存在しています。エクソソームは長い間、重要な細胞内内容物の放出に関与すると考えられていましたが、近年では生体内で脂質や蛋白質、mRNA/miRNA等を離れた細胞や組織へ運ぶ新たな細胞間情報伝達の媒体として注目されております。この過程が免疫細胞の活性化や不活性化、癌細胞の進展、神経変性疾患の発症など幅広い生命現象に関与することが示唆されており、エクソソームの生理的または病態生理的機能の研究が世界中で活発に行われているとともに、これらの

機能を用いた臨床応用研究が急速に展開されております。また、エクソソームに含まれる蛋白質は数万種類、mRNA/miRNAは数千種類以上あると想定されていますが、その構成は分泌細胞ごとでも異なるとともに、細胞の状態によっても大きく変化する為、エクソソームを用いた新たな診断法や治療法、バイオマーカーの開発が期待されております。このように近年エクソソーム研究は様々な研究領域において急速に広がっておりありますが、未だに精製技術や解析方法、モデル動物などスタンダードとなる実験系がきちんと確立されておらず、研究分野は混沌とした状態です。そこで私達は、エクソソーム研究の基盤となる技術の開発やエクソソームの生体内における制御機構を解明することにより、世界をリードする研究成果を金沢から発信することを目指しております。中でも最も重要な課題の一つであるエクソソームの高純度精製法の開発に私達は成功し、和光純薬工業から純国産試薬として世界販売が開始され好評を得ております。更に最近、エクソソームの放出や取り込みを制御する分子が同定できましたので、これらの分子の遺伝子改変マウスを作製することにより、エクソソーム研究に有用なモデルマウスを開発中です。また、様々な病態発症におけるエクソソームの関与について、臨床研究室



や製薬企業と共同研究を進めており、今後エクソソームを標的とした診断法や治療法の開発に結び付けたいと考えております。

本教室のもう一つの柱として、マクロファージなど貪食細胞による炎症疾患の発症機構の解明を目指しております。例えば、ウイルス感染や自己免疫疾患・悪性腫瘍などによって生体内で重篤な炎症反応が生じると、マクロファージが暴走し自己の血球を生きたまま貪食する血球貪食症候群が引き起こされます。この疾患は極めて重篤な致死性疾患ですが、その発症機構はほとんど解明されておられません。そこで私達は、マクロファージに自己血球を生きたまま貪食させる実験系を樹立し、この系を用いて血球貪食を促進する受容体蛋白質を同定することに成功しました。この受容体の機能を阻害することにより、血球貪食症候群の治療法の開発が可能になると期待しております。一方、活性化した貪食細胞は、リソソームから消化酵素を放出し、周囲の細胞や組織を傷害することが知られています。

最近、この過程を制御する分子が同定できましたので、この分子を阻害する試薬を開発することにより、貪食細胞によって引き起こされる血管炎や大動脈解離などの組織傷害の予防や治療に貢献することを目指しております。

教育

医学類三年生の免疫学講義と実習は、これまでがん進展制御研究所の向田直史教授と

須田貴司教授にご担当頂いておりましたが、今年度より本教室が担当しております。本学のスーパーグローバル大学（SGU）事業のもと、英語での授業を検討しておりますが、まず今年度は教材を全て英語化しました。講義資料に用いたBasic Immunology (Elsevier社)は、ハーバード大学医学部でも用いられている教科書ですが、図が豊富でわかりやすく、複雑な免疫機構も丁寧に説明すれば、学生はちゃんと理解してくれることが分かりました。もう一つ講義で用いているCase Studies in Immunology (Garland Science社)は、最新の分子免疫学の知見と実際の患者症例を用いて、様々な免疫病の病態発症メカニズムを分かりやすく解説した名著で、基礎医学研究の重要性を多くの学生が理解してくれたと思います。昨年度も少し講義を行いました。今年度は英語教材を用いることで、内容を理解しようと学生の授業態度が良くなったように思いました。しかし、SGU事業で目標に掲げられている講義の完全英語化は非常に難しいと感じております。

おわりに

金沢大学に着任させて頂き一年余りが経ちました。これまで多くの先生方や職員の方々に支えて頂き、深く感謝を致しております。免疫学の教育と研究が益々重要となる中で、本教室が新設されたご期待に応えられますよう、最大限の努力を続けていく所存です。十全同窓会の諸先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

(華山 力成 記)

Juzen FORUM HISTORICUM

十全歴史ひろば [5]

金沢医学館第一期生 藤本純吉の生涯 (その1)

編集委員 山本 健

金沢医学館の栄誉ある第一期生（正確には第一期入学生⁽¹⁾）は稲坂謙吉、上杉寛二、上出達三、須賀忠愛、不破鎖吉、藤井貞為、藤本純吉、三沢敬吉、宮北徳の九名である。彼らのモノクロ集合写真（図1）は、金沢大学医学部創立百五十周年記念モノメント「医の源流 未来への継承」のモチーフとして知られている⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾。

金沢市立玉川図書館近世史料館は、藤本純吉が寄贈した史料を「藤本文庫」として所蔵・管理している。史料館のご努力によって藤本文庫の目録はデジタル化され公開されているが、その収蔵史料数は三千点を超え、目録に眼を通すだけでも相当の時間を要する。藤本純吉の履歴は、多留淳文先生⁽⁵⁾、竹内桂一先生⁽⁷⁾が報告されている。今回は藤本文庫の「藤本純吉傳」（以下「純吉傳」⁽⁸⁾）と、藤本純吉のご子孫である藤本成明氏から提供された資料を基に、純吉の一生を追補する。なお、文献⁽⁵⁾⁽⁷⁾には、年月日、人名表記に微妙な違いがある。本稿では純吉本人が記したと考えられる「純吉傳」⁽⁸⁾を底本とし、文献⁽⁵⁾⁽⁷⁾と記述が異なる箇所傍線を付す。



図1「金沢医学館一期生」（金沢市医師会蔵）

自然に入門して純吉と改名する。純吉元服時（元治二年三月、十六歳）の名乗は「清辰」であり、この名乗は純吉の筆名として藤本文庫スロイス講義録の数箇所に使われている⁽⁹⁾。明治九年（二八七六）藤本長左衛門長女 早と結婚。以後純吉は太鼓、能、書道、漢学、国学、歌学、武芸を磨く。

純吉は前田家藩主の太鼓お相手役を務めるも、明治三年（一八七〇）、維新に伴い御手役者は廃止され、士族籍から平民籍へ編入され無禄となる。維新の激変を体験して、純吉は価値観を一変させる。この顛末は「純吉傳」に次のように記されている。「國內大変革に方り従来ノ家業ヲ以テ身ヲ立テ家ヲ継続シ難キヲ悟リ断然家業ヲ棄テ、醫士ニナラント志シ明治二年二月旧藩主侍醫黒川自然ニ随シ醫學ヲ修業ス」。明治四年一月金沢医学館入学。同三月から七年九月までスロイスに、八年八月から十一年十二月までホルトルマンに附いて医学を学んだ。

純吉は「男三女を儲けた。早との間に生まれた長女操は、前田栄次郎（後に式部）に嫁ぐ。前田式部・操については竹内論文⁽⁶⁾に詳しい。純吉の妻 早は操を生んで一カ月後、明治十一年に病死。純吉は明治十五年に養父藤本長左衛門の二女（早の妹）貞を後妻に迎える。明治十八年一月二女茂、明治二十一年一月には待望の長男喜久雄が生まれる。喜久雄は東京帝大造船学科を卒業し海軍造船少将に昇進して将来を嘱望されたが、昭和十年脳溢血で急死。享年数え年四十八歳であった。

二女 茂は明治三十七年に平崎家へ嫁ぎ四男一女を儲ける。茂の四男成男氏（大正五年生）は幼少時に父親と死別し、祖父である藤本純吉に引き取られ、金沢味噌蔵町で育てられた。

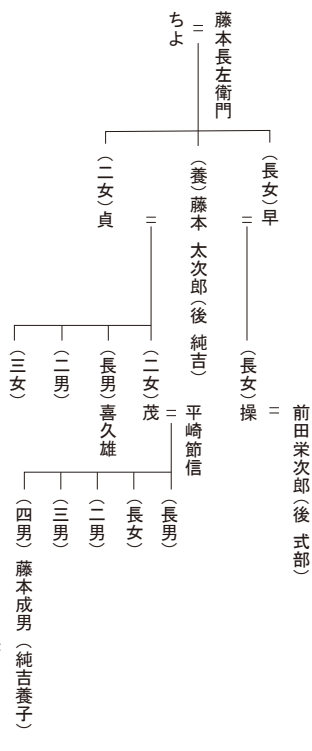


図2「藤本純吉と家族の系譜」



図3「藤本純吉写真」
自宅で開業していた。六十歳代の写真と思われる（藤本成明氏提供）

純吉は昭和十二年に孫の成男を藤本家の養子に迎えた。純吉がこの世を去る丁度半年前のことである。医学部創立百五十周年記念モノメントの制作に際して藤本純吉の写真（図3）をご提供くださった藤本成明氏は成男氏のご次男であり、さいたま市に健在である。成明氏の母上都子さんがご主人成男氏からの伝聞として成明氏に話された純吉の人物像は、次の通りである。「純吉は非常に厳格で、成男は著の上げ下ろしに至るまで厳しくつけられた。ただ、冷静で厳格ではあるが、決して冷たいということではなかった。能の観世流本家の当主が夭折したとき、頼つてきた年少の子息の面倒を数年にわたつて見、能の修行をさせた。」⁽⁹⁾

藤本純吉と家族の系譜（図2）

藤本純吉は、嘉永三年（二八五〇）四月十七日、金沢飛梅町加賀藩士小泉弥太郎・寿々の次男として生まれた（幼名三四郎）。純吉は七歳（二八五六）から藤本長左衛門の内弟子となり観世流能太鼓修行を始める。藤本家は代々前田家御手役者の家柄であり、長左衛門は御手役者第七代の藤本家当主であった。長左衛門の芸道の鍛錬は厳しく、純吉は何度も泣いたと記している。十五歳の時（元治元年（二八六四）九月）、藤本長左衛門・ちよの養子となり太次郎と改名し、さらに明治二年（二八七〇）に医学修行のため黒川

- 【参考文献】
- (1) 赤祖父一知、山本健、山本博「金沢医学館開学初期の入学生」北陸医史第35号 p.6-12 (2013) (平成25年)
 - (2) 山本博「金沢医学館第一期生群像」建立の経緯「金沢大学医学部十全同窓會報」創立百五十周年祝典号 p.11-2012 (平成24年)
 - (3) 石田陽介「二枚の写真から」『金沢大学医学部創立百五十周年記念誌』p.436、金沢 田中昭文堂、2012 (平成24年)
 - (4) 山本健、板垣英治、赤祖父一知「金沢医学館第一期生の集合写真はどこで撮影されたか」北陸医史 第38号 p.70-77, 2016 (平成28年)
 - (5) 多留淳文 十全同窓人物伝 (13)「講義筆記録を残した藤本純吉（本学第一回卒）」金沢大学医学部十全同窓會報 二八号 p.15, 2001 (平成13年)
 - (6) 竹内桂一「藤本純吉と加賀前田家」北陸医史 第23巻 第1号 p.9-10, 2002 (平成14年)
 - (7) 竹内桂一「金沢大学医学部創立百五十周年記念モノメント除幕式その一」藤本純吉（八五〇～一九三八）金沢大学医学部十全同窓會報 創立百五十周年祝典号 p.12-14, 2012 (平成24年)
 - (8) 藤本純吉「藤本純吉傳」金沢市立玉川図書館近世史料館 藤本文庫、史料番号 特096-0-491
 - (9) 藤本成明氏 私信

支部だより

高知支部

高知放射線医学会主催の講演会に、中沼安二、蒲田敏文両先生をお招きし、胆道、膵臓画像診断の最近のトピックスについてご講演を賜る機会を得ましたので、当日十全同窓会高知県支部会を併催させていただき運びとなりました。ご講演では、中沼先生からは新しい胆道がん取り扱い規約に関する、わかり易く、しかも詳細な解説をしていただき、蒲田先生からは膵臓がんの画像診断について、鑑別診断も含めた多数の症例を供覧していただきました。

肝胆膵疾患の診断においては、金沢大学は世界をリードする業績を長年にわたって挙げられており、その中心的立場に於けるお二人のお話を、高知で拝聴できる機会が得られたことは、またとない機会であり、また聴取者にとっても強烈なインパクトを与えられた内容でした。筆者も、中沼先生が金沢弁まる出しで、臨床講義をされていた頃を懐かしく思い出しました。

講演の後、高知県支部の面々と交流を深めていただきました。会員の横田医師は、中沼先生とは同期でいらつしやり、昔話に花を咲かせておられました。市川支部長からは、先日開催された金沢大学ホームカミングデイの様子がスライドで紹介されました。我々の時代は、お城の中に教養部がありました。今は角間キャンパスに移っており、筆者は訪れたことがないので、とても新鮮に感じられました。

さて、高知県支部も、ご多分に漏れず高齢化が進み、年々同窓会の出席者数が減ってきておりますが、一方では新たな加入者もあることから、少なくとも年一回の同窓会開催は続けていきたいと思います。と、誓い合って散会となりました。

筆者の怠慢により、ご報告が遅くなりましたことを、紙面をお借りしましてお詫びも申しあげます。

出席者…市川博和（昭和四十二年卒業）、岩崎英達（昭和三十七年卒業）、船戸豊彦（昭和四十八年卒業）、竹内一八（昭和五十一年卒業）、横田哲夫（昭和四十九年卒業）、竹田修司（平成六年卒業）、森田莊二郎（昭和五十六年卒業）

ゲスト…金沢大学名誉教授（現静岡がんセンター）病理診断科参与 中沼安二先生、放射線科教授 蒲田敏文先生

（森田 莊二郎 記）

山形支部

平成二十七年十一月七日に毎年定例の支部総会を蔵王温泉の蔵王国際ホテルで開催しました。現在十一名の会員がおりますが、今回の参加者は酒田市から真田稔（昭和三十四年卒業）、中島良明（昭和三十九年卒業）、池田利史（昭和五十年卒業）、鶴岡市から石原融（昭和四十六年卒業）、山形市から森谷直樹（昭和四十七年卒業）、森谷敏幸（平成九年卒業）の六名でした。太田陽一（昭和三十四年卒業）、工藤良三（昭和四十六年卒業）、矢島謙志（昭和五十年卒業）、石橋正道（昭和六十一年卒業）、今野昭宏（平成八年院卒業）は都合が悪く参加できませんでした。



今回は東北大学名誉教授の岡本宏先生（昭和三十九年卒業）をお招きしました。昨年七月の十全同窓会総会に山形新幹線から大宮で乗り継いで北陸新幹線に初めて乗りました。山形から金沢までちょうど五時間で、以前に比べると非常に快適でした。岡本先生も参加されており、懇親会でお話ししていたら金沢に戻られたとのこと。仙台にお住いの頃何か山形支部総会にお招きしたのですが、お忙しくて実現しませんでした。改めて支部総会へお招きしたところ快諾していただき、十全同窓会事務局のお手配をいただいて来形していただきました。山形駅までお迎えし、途中で山形の蕎麦を食べていただいたら「おいしい」とのこと、蔵王温泉まで四十五分、紅葉の終わった晩秋の蔵王とホテルの硫黄泉をゆっくり楽しんでいたいただきました。

総会の前に、「糖尿病、自閉症と統合失調症―その生化学にせまる―」の題でスライドを使って講演していただきました。かの有名な「岡本モデル」はマウスにおける実験糖尿病で、膵β細胞がどのようなメカニズムでネクロシスを起こすか、生化学的に解明したのですが、現在ではアポトーシスを除く、種々の細胞のネクロシスの普遍的メカニズムとして認められてきたというお話でした。かなりハイレベルな内容でしたが、久しぶりに頭に活性化されたような気がしました。酒田から参加した中島先生が岡本先生と同学年で、昔の懐かしい話に花が咲いたようです。

二次会に場所を移しても岡本先生のお話が面白く、東北大学の監事は大変だったこと、富山医科薬科大学の教授の頃、私と同学年の能登先生、宮元先生にマウスの膵β細胞を大量に分離してもらったこと、東京女子医科大学の教授になった内潟先生は優秀だったこと、東北出身の先生方とはつきにくい、頑張り屋が多くやさしいこと、東北大学に寄附した「種の起源」の初版本に最近千五百万円の値がついたことなど、面白いお話を聞かせていただき、参加者皆が聞き入ってあつというまに夜が更けました。

翌日、将棋の駒を見たいとのことご希望で、天童市までお連れしましたが、残念ながら気が入ったものは探せませんでした。昼過ぎの新幹線で金沢にもどられました。遠いところまことにありがとうございました。

（森谷 直樹 記）

三重支部

平成二十七年全同窓会三重支部総会は、平成二十八年二月十四日(日)に三重県津市の料亭「はま作」で行われました。本年度総会には十一人の会員が出席しました(昨年十一名)。三重支部では、支部長原田資先生(昭和四十六年卒業)のもと、今回の総会も、和やかに進行していきました。(近藤峰生先生(平成三年卒業)、伊藤健太郎先生(平成二十一年卒業)、野口孝先生(特別会員)は、御用事のため欠席となりましたが、来年はご参加頂ける事を願っています。現在の三重支部の会員数は二十一名です。)

会計報告の後、水本龍二先生より、八甲田山の雪中行軍のお話や、香林坊の謂れ、その後、南下軍の歌、北帰行と続き、貴重な四高時代のお話をうかがう事が出来て、参加された先生がた皆が感動していました。毎年、題材を考え、ご参加して頂ける水本先生にとっても感謝しております。また、金沢大学の医師国家試験の合格率や卒業後の進路のお話をうかがいました。現在の金沢大学の近況なども聞け、大変興味深かったです。その後は、いつものように、懇談会に移りました。懇談会では生駒一徹先生(昭和二十一年卒業)が、歌を披露されました。御年九十四歳になられても各方面で活躍されていることにとても感銘を受けました。そして、懇談会も和やかな雰囲気の中に終わり、閉会となりました。また、来年の同窓会も楽しみにしています。今回参加できなかった先生がたも、是非、ご出席をお待ちしています。



後列左から…大石晃嗣(昭和六十三年卒業)、東谷光庸(平成十三年卒業)、黒川義博(平成二十一年卒業)、伊藤敏秋(昭和五十二年卒業)、中瀬玲子(昭和六十二年卒業)、春木祐司(平成十七年卒業)

前列左から…森一満(昭和五十一年卒業)、水本龍二(昭和三十年卒業)、原田資(昭和四十六年卒業)(支部長)、生駒一徹(昭和二十一年卒業)、祖父江直久(昭和五十一年卒業)(敬称略)

(黒川 義博 記)

能登支部

平成二十八年六月四日(土)に、第七回の総会・講演会・懇親会を開催しました。会員数は百六十三名で、出席者は十三名でした。本年度は役員改選もなく、役員会を総会の直前に開催しました。役員会、総会では村本信吾支部長の司会のもと、規約の確認、役員の異動、会計報告などが行われ、物故会員の報告では、一月に逝去された羽咋市の福田喜雄先生に黙祷を捧げました。また、村本支部長より、能登支部としての事業展開として、「能登支部会報」の発行に関する提案が出されました。また、来年度の総会開催の場所や新たな役員に関する提案も提出され、次年度に向けての検討課題となりました。役員会、総会に引き続き、本部全同窓会理事で金沢大学附属病院長の蒲田敏文放射線科教授をお招きして、ご講演を賜りました。

村本信吾支部長の座長で始まった蒲田先生のご講演は、ご自身が志賀町(旧富来町)の出身であることから始まり、医学類(医学部)の学生の入学状況、国家試験合格率などを説明されました。十数年かかった附属病院再開発工事がほぼ完成したこと、プロムナード完成式を行うことなどもお話しされ、日本一きれいな大病院院であるとのことでした。続いて、院長になられて打ち出された病院の目標を説明されましたが、職員が明るく元気に働ける職場環境を第一に挙げられ、先生の人柄が偲ばれ、同じく院長職に就いている身として、感銘を受けました。教育については、最近の国家試験の状況から積極的に国試対策の授業をされている

とのことでした。また、遠隔診断に関するNPO法人を立ち上げ、能登北部や遠くは舞鶴共済病院の画像診断も手がけているものの、人手不足からこれ以上の拡大は難しいとのことでした。最後に、先生のこれまでの業績について説明されました。特に脾臓の画像診断については、旧第二外科教室との共同研究にて詳細な画像解剖学についての教科書を出されており、世界にも類を見ないユニークなものとのこと説明でした。時間が十分でなく、まだまだ話し足りない様子でした。続いて懇談会に移りましたが、蒲田教



授を囲み、支部長の挨拶の後、常任顧問佐原吉博先生の乾杯で和やかに懇親会が始まりました。蒲田教授を含めて十四名でもあり、アットホームな雰囲気でも話しも弾み、出席者それぞれの近況報告など楽しく聞かせてもらいました。最後は、前支部長荒井邦夫先生から閉会の挨拶があり、お開きとなりました。次年度には役員改選もあり、支部長からの新たな事業展開の提案についても検討していくこととなりますが、総会への参加者増への取り組みも必要となります。

(上木 修 記)

千葉十全同窓会納涼会

平成二十八年七月二十三日(土)に、千葉十全同窓会納涼会がおこなわれました。

今回は、新井公人先生(昭和五十五年卒業)が昨年四月に千葉東病院院長に就任されたお祝いと、今月、諸岡信裕先生(昭和四十八年卒業)・元千葉十全同窓会幹事)が、茨城県医師会の会長に就任されたお祝いを兼ねた会です。お二人ともおめでとございます。多くの同窓生(十九名)が参加し、シャランを開けて、お二人の就任をお祝いし、生水真紀夫会長(昭和五十六年卒業)の開宴の挨拶と、能川浩二先生(昭和四十年卒業)の乾杯挨拶で会は始まり、話も非常に盛り上がりしました。幹事としてもとてもうれしい会でした。また、千葉県では成田に医学部が新設されるので、その影響についても様々な意見が聞かれました。

(高橋 敬一 記)



滋賀支部

平成二十八年年度金沢大学医学部十全同窓会滋賀支部総会が、平成二十八年六月十二日、琵琶湖東岸にあるエクシブ琵琶湖で開催されました。同窓会本部よりは、当初、会長中村信一先生に来ていただく予定でしたが、ご都合により、代って理事長大井章史先生に来ていただきました。支部長浅野定弘先生の開会のご挨拶に

続き、大井章史先生に、金沢大学医学部の現状と大学周辺の昨今を、金沢の風景写真を交え、お話しいただきました。続いて懇親会では、ご出席の先生に近況を話していただき、まだまだ話し足りないくらいに歓談が続きました。

今回出席された先生は、写真前列左より江竜喜史先生(昭和三十九年卒業)、浅野定弘先生(支部長・昭和四十二年卒業)、大井章史先生(十全同窓会理事長)、安田美代子先生(昭和四十九年卒業)、中列左より三宅隆先生(昭和四十三年卒業)、真下六郎先生(昭和四十六年卒業)、山本明先生(昭和四十六年卒業)、朝日晋先生(昭和四十五年卒業)、白石制先生(昭和四十二年卒業)、後列左より北村隆(昭和五十二年卒業)、伊藤誠先生(昭和五十四年卒業)、谷徹先生(昭和五十年卒業)でした。

当県にある滋賀医科大学では、現在五名の当支部会員の先生が教授として活躍されています。生活習慣病予防センター特任教授上島弘嗣先生(昭和四十六年卒業)、バイオメディカル・イノベーションセンター特任教授谷徹先生(昭和五十年卒業)、心臓血管外科学教授浅井徹先生(昭和六十一年卒業)、社会医学教授三浦克之先生(昭和六十三年卒業)、生化学教授縣保年先生(平成二年卒業)の先生方です。今回は、谷徹先生が出席されました。また同大学循環器内科学前准教授伊藤誠先生と理事長大井章史先生とは同期生とのことで、なつかしそに歓談されていました。

蛇足ですが、当県のJR安土駅周辺には、近江源氏佐々木氏ゆかりの沙沙貴神社と佐々木荘(旧安土町付近とされています)があります。近江源氏佐々木氏の家紋は四つ目結で、時折大河ドラマなど



でみかけることがあります。また、近くには、織田信長が築いた安土城(跡)があります。大手道の石段を登り、両側に伝羽柴秀吉邸跡、伝前田利家邸跡、伝徳川家康邸跡を見ながら、山頂の天守跡まで行くことができます。(北村 隆 記)

神奈川支部

平成二十八年六月二十五日、中村信一金沢大学十全同窓会会長をお迎えし、横浜駅前崎陽軒本店にて十全同窓会神奈川支部総会が開催されました。当支部会は長く東京、埼玉支部会と合同で開催されておりましたが、東京まで出向くのが大変であるとお声を頂戴し、久しぶりの開催となりました。

最初に島利夫支部長(昭和四十二年卒業)より、神奈川支部の歴史についての

話がありました。特に同門の中で初代鎌倉市医師会会長・勝見正成先生（明治六年・金沢医学館卒業）という偉大な先輩がいらっしゃって、鎌倉大仏で有名な長谷寺に葬られている、ということが紹介されました。引き続き中村信一十全同窓会会長より、「医学部の近況」と題してご講演をいただきました。北陸はもとより、国家的事業への参画、国際的な人材育成など金沢大学で取り組まれている事業について紹介され、また宝町キャンパスの再開発についてご紹介いただき、参加者一同奮い立たされる思いが致しました。引き続き横浜市大神経内科名誉教授の小阪憲司先生（昭和四十年卒業）より「第二の認知症・レビー小体型認知症（DLB）をめぐる」と題してご講演いただきました。DLBの診断は勿論ですが、DLBがDLBとして国際的に認知されるまでの研究段階からのご尽力に深い感銘を受けました。

懇親会では、各年代の代表の先生より近況報告がありました。久々の同窓会での再会を相親しみ、また学生時代に中村信一先生から直接ご指導いただいた参加者も多く、盛況のうちに閉会となりました。今回は県内の二百五十五名の支部会員の先生に案内状をお送りし、全会員の二一％に当たる五十三名にご参加いただきました。次回以後も開催できるように努めていきたいと思っておりますので、今回ご参加いただけなかった先生もお誘いあわせの上にご参加いただけましたら幸いです。

参加者（敬称略・卒業年次）…中村信一（昭和四十三年卒業・来賓）、谷野淳史（昭和二十六年卒業）、渡邊能斌（昭和

二十七年卒業）、上田巖（昭和三十年卒業）、元田憲（昭和三十四年卒業）、向平淳（昭和三十六年卒業）、岡野慎一（昭和三十七年卒業）、小島路久、原田契一、柳澤和孝（昭和三十八年卒業）、北山禎昭、小阪憲司、鈴木豊（昭和四十年卒業）、



田中重男（昭和四十一年卒業）、島利夫（昭和四十二年卒業）、若杉（田中）春枝（昭和四十七年卒業）、谷村繁雄、藤田伸二、細川治、柳沢研一、山田裕一（昭和五十年卒業）、池田彰良（昭和五十一年卒業）、中西太一（昭和五十三年卒業）、北村佳久（昭和五十五年卒業）、入江（藤田）幸子（昭和五十六年卒業）、石田文生（昭和五十八年卒業）、高橋伸之、皆川冬樹、山崎健、山脇優（昭和五十九年卒業）、川口（中村）とし子（昭和六十年卒業）、高田寛人（昭和六十三年卒業）、川瀬裕志、渡邊透（平成元年卒業）、織本健司、西尾夏人（平成二年卒業）、河原太、作田和茂、釘本（篠田）千春（平成四年卒業）、加藤秀明（平成五年卒業）、佐藤広隆、村田英俊（平成七年卒業）、岩城卓、喜多大輔（平成八年卒業）、足立大樹、紺崎友晴、龍瀧憲治（平成九年卒業）、伊藤陽子、野村（杉山）直子（平成十年卒業）、田中（伊賀）千洋、島浩史（平成十二年卒業）、神田怜（平成二十七年卒業）、藤井啓太、山上幹（平成二十八年卒業）（島 浩史 記）

関東地区拡大支部

平成二十四年からの定番の会場となっている明治記念館において、本年も十全同窓会関東地区拡大支部総会が、八月六日に開催されたので、報告する。一昨年は台風が近づいていたので会員の参加が危ぶまれたが、昨年は猛暑であった。本年は、酷暑。三十七、三十八度の酷暑で、まともに歩くと、夕方でも眼を開けられないくらいに日差しが強くまぶしい日であった。来年のこの日はどうなるのか、表現でき

る日本語があるのかしら、と危惧する。本年の同会は、明治記念館において、八月六日（第一土曜日）の午後五時から開催した。酷暑の中、四十七名の会員が参加した。うち、本年三月卒業の新会員が一名参加された。

中村信一十全同窓会会長の本部からの近況報告は、新装なった金沢大学角間キャンパス、金沢大学医学部附属病院の紹介について、グローバル化が進む金沢大学が紹介された。そして、素敵な医学部のプロムナードの紹介。日経HPの「価値ある大学二〇一七版 就職力ランキング」によると、金沢大学は、長岡技術科大学、東京大学、東京海洋大学、早稲田大学に次いで第六位という。その中で、千葉、金沢、長崎大学医学部との、三大学革新予防医科学共同大学院が設置されたことは本年のトピックスであろう。目指していく先進的予防医学とはどのような進め方なのかについて、詳細にお示しくださった。

昨年は、金沢大学のグローバル化にびっくりするばかりで、そのうち英語が標準語になるのではなにかと思っただが、本年の圧巻は、三大学共同大学院設置である。

中村信一会長の近況報告の後、は、本年は、昭和四十五





年卒業の日本医科大学特任教授木田厚瑞先生のご講演であった。タイトルは、「全身疾患としてのCOPDの問題点」。COPDは慢性閉塞性肺疾患のこと、これも名前くらいは知っている昨今であるが、さすが木田先生のご講演は、会場が静まった。COPDは認知症、うつとも関連し、また多くの生活習慣病とも近い関係にある。最後にネアンデルタール人由来の遺伝子とCOPDを含む生活習慣

病との関連についても言及された。

実は、木田先生の一週間の日常を追うテレビ番組の取材が前日から行われていて、木田先生を追って、テレビ局スタッフが明治記念館にもやってきたのである。同級生の何人かの先生も取材対象となった。放映は、テレビ朝日系のたけしの家庭の医学の中の、ベストドクターズの初回である。予定は九月二十七日とのこと。島利夫神奈川支部長に乾杯のご発声をしていただき、懇親の場となった。各支部会長からの挨拶、遠方から駆けつけた会員、などなど、全員から近況を報告いただいた。来年から、茨城県十全同窓会もこの支部総会に合流することとなった。なお、茨城県諸岡信裕支部長は今度茨城県医師会会長にも就任となった。お目出度いことでご挨拶をいただいた。

最後に、埼玉支部長瀬戸幹人先生のギターに合わせて、四校寮歌を斉唱し、平松慶博先生の閉会のご挨拶をいただき、散会となった。

来年も、八月第一土曜日、明治記念館、午後五時からである。

(十全同窓会東京支部会長

内潟 安子 記)

静岡支部

平成二十八年九月三日に静岡市駅前のセンチュリーホテルにおいて、中村信一同窓会会長をお招きして金沢大学十全同窓会静岡支部総会が開催されました。九月の第一土曜日ということで、学会、研究会などと重なったにもかかわらず、県内から十三名の会員の方々にご参加いただきました。

総会はず、土屋和弘同窓会静岡県支部長のご挨拶の後に、来静いただきました中村信一会長のご挨拶ならびに金沢大学医学部の近況についてご講演いただきました。「医学部の近況」と題して、日経新聞で紹介された金沢大学の桜から、医学類の桜の写真に始まり、そして金沢大学の学内の動き、講座の変遷、最近の研究分野での活躍、海外における大学の活動など非常に広範囲に最近の動きに關しましてご紹介いただきました。なかでも脳、肝のインターフェースとして、研究センターが開設されましたが、中村先生としては脳と肝臓の間を取り持っているのは腸内細菌叢ではないかという非常に興味深い仮説もお教えいただきました。

その後、前々支部長の水野先生の乾杯により懇親会になりました。ご参加の先生方がスピーチされました。世代の違う先生方が自分の金沢大学の学生時代の話から、また近況報告などを話され、アルコールも入って大いに盛り上がりしました。ここでも中村信一同窓会長からお話をいただき、個人としては学長顧問を退任後も各分野で非常にお忙しいこと、最近実践していることなどお話しいただきました。参加者一同が、どうしたら認知症予防ができるかその方法について大変真剣に伺いました。

最後は水野先生の締めめの挨拶で二次会へと移動しました。二次会にも多くの先生がご参加いただき、遅くまで話はつづきました。来年の再会を約束して解散となりました。

参加者以外に金沢大学卒業後に、静岡県に開業されている方や勤務されている方が相当数おられます。是非、今後とも



り多くの、特に若い先生方にご参加していただき、十全同窓会、金沢大学をさらに盛り上げていければと思います。そのために、開催時期など含めてまた検討しようということになりました。以上よろしくお願い申し上げます。

参加者 前列左から 内田律子（平成九年卒業）、佐野勉（昭和四十四年卒業）、水野洋一（昭和四十一年卒業）、中村信一会長、土屋和弘（昭和四十四年卒業）、東茂樹（昭和五十二年卒業）、後列左から 加藤裕之（昭和六十年卒業）、梅原靖彦（昭和五十八年卒業）、池谷直樹（昭和五十八年卒業）、岡井高（昭和五十二年卒業）、大場範行（昭和五十八年卒業）、片桐浩久（昭和六十二年卒業）、石神直之（昭和五十五年卒業）、深澤洋幸（昭和五十六年卒業）（池谷 直樹 記）

茨城支部

二年ぶりの十全同窓会茨城支部総会が、平成二十八年九月三日(土)に水戸京成ホテルにて開催されました。今回は、二年ぶりに諸先生方のお元氣な姿に接することと、諸岡の茨城県医師会会長就任の挨拶を兼ねての開催であり、お二人の来賓にも参加いただく事が出来ました。来賓の特別講演として、小生の同級生である、前金沢大学医学部長、恵寿総合病院院長の山本健先生(昭和四十八年卒業)に「金沢大学医学部の現状について」、そして、千葉大学医学部生殖医学講座教授の生水真紀夫先生(昭和五十六年卒業)に「周産期医療の課題について」のご講演を頂きました。山本先生からは、金沢大学医学部創立百五十周年記念プログラムナード完成式の報告及びそのお礼が述べられ、生水先生からは、産婦人科における緊急オペの現状とその課題さらに、増えつつある女性医師のサポートなどについての対応などが述べられました。その後、参加頂いた十四名の会員と二名の来賓全員の集合写真を撮影し、懇親会が始まりました。田崎義昭先生(昭和三十二年卒業)の乾杯のご挨拶のち、茨城支部長の諸岡から、県医師会長に就任したいきさつについて述べ、茨城県の医療の現状、特に人口当たりの医師数は全国四十六位(下から二番目)であること、地域医療構想の問題点などについて説明を行いました。その後、全員が自己紹介と現況報告、金沢の思い出が述べられて和氣あいあいのうちに散会となりました。北陸新幹線で金沢まで「かがやき」で二時間半の近さになり、金沢は日帰り圏内であるとの再確認と、もう少し若手の医師の参加を

医師会コーナー

茨城県医師会会長就任挨拶

諸岡 信裕 (昭和四十八年卒業)



平成二十八年六月開催の茨城県医師会代議員会で茨城県医師会会長に選任されました、諸岡信裕です。医師会会長と大変身に余る大役ではありますが、どうぞ宜しくお願い致します。

私は、茨城県生まれで、水戸市内の高等学校を卒業後、昭和四十二年金沢大学医学部に入學し、同四十八年に卒業後、千葉大学循環器内科に入局、そこでX線CTを使用した心疾患の非観血的画像診断学の研究を行い、医学博士号を頂きま

増やすことが課題であるとの認識で一致しました。参加して頂きました諸先生方に対して、心から御礼申し上げます。

(諸岡 信裕 記)

写真右から(敬称略)

前列・今高國夫(昭和四十四年卒業)、田崎義昭(昭和三十二年卒業)、生水真紀夫(昭和五十六年卒業)、諸岡信裕(昭和四十八年卒業)、山本健(昭和四十八年卒業)、松本英夫(昭和三十八年卒業)、田上恵(昭和四十八年卒業)

二列目・大谷幹伸(昭和五十三年卒業)、水谷太郎(昭和五十二年卒業)、加納勝利(昭和三十九年卒業)、宮本信也(昭和五十三年卒業)、仁平武(昭和五十八年卒業)、

三列目・山尾秀二(平成四年卒業)、片田正一(昭和五十九年卒業)、原田洋一(平成三年卒業)、矢口裕一(平成四年卒業)



した。その間、講師や医局長を兼務していた関係で、千葉大学衛生学能川浩二教授(金沢大学医学部卒業)のご指導のもと、十全同窓会千葉支部幹事を長年務めさせて頂きました。平成五年、茨城の義父の病院に戻ることにになり、茨城での地域医療の実践が始まりました。茨城県は、人口当たりの医師数は全国でも最下位に近く、医療従事者も極めて少ない現状です。平成十二年より、茨城県医師会理事に就任し、社会保険、産業保健、地域医療などの業務を担当しました。その後、平成二十年より同副会長に就任し本年から会長職に就いております。平成二十五年三月から、茨城県公安委員会委員を兼務しており、茨城県警察の管理役として、毎週定例会議を実施しています。金沢を離れて、四十数年が経ちましたが、今でも、小立野から歩いて兼六園内を通り、石川門から教養に通学した思い出は、脳裏から離れる事はありません。その当時、特急「はくたか」で、東京・金沢間が約八時間半かかりましたが、現在の北陸新幹線では二時間半であり、隔世の感があります。現在、十全同窓会茨城支部長の立場で、時々、金沢大学医学部に伺う事もあります。大学病院を含めた宝町キャンパスの新しい建物は、目を見張るものがあり、感動を覚えました。

現在、医療界では、地域包括ケアシステム、地域医療構想、新専門医制度等の諸問題が山積しておりますが、十全同窓会や医師会等の諸先輩方との連携を取りながら、市民・県民の健康保持増進の推進のために医師会活動を進めてゆきたいと思っております。

今後とも、ご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

同窓生の消息

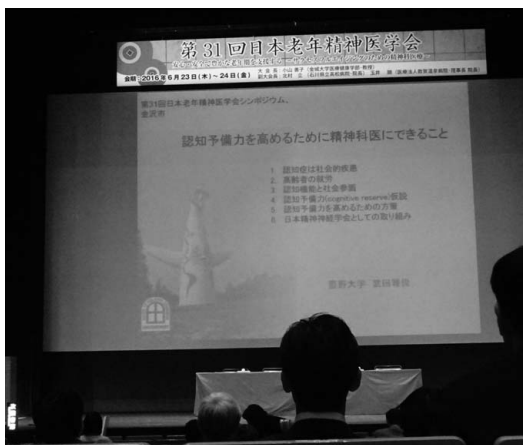
第三十一回日本老年精神医学会報告

金城大学医療健康学部・教授 小山 善子

第三十一回日本老年精神医学会は、小山善子大会長のもとに平成二十八年六月二十三日（木）～二十四日（金）に金沢歌劇座で開催された。千二百人を超える参加者であった。

日本老年精神医学会は老年精神医学に関する分野の科学的研究の進歩・発展普及をはかる活動を行い、わが国の老年精神医学の発展に寄与することを目的としている。構成員は精神科医がほとんどであるが、神経内科医、看護師、臨床心理士、作業療法士なども加わり、現在会員数は二千七百人である。

我が国は現在高齢者人口が三千三百八十四万人で、総人口の二十六・七%を占め、八〇歳以上の人口が初めて千万人を超え



る状況である。negativeにとらえがちな高齢者をpositiveな面に向けたのがサクセスフルエイジングの理念であり、サクセスフルエイジングの実現にどう支援していくかは超高齢社会を迎え、重大な課題である。本学会のメインテーマは「安心・安全で豊かな老年期を支援する（サクセスフルエイジングのための精神科医療）」である。

学会は基調講演、大会長講演、特別講演三題、シンポジウム十題、企画教育講演七題、ワークショップ、実践講座、一般口演発表五十三題、ポスター発表六十一題、ランチョンセミナー七題、モーニングセミナー、イブニングセミナー、施設見学と盛り沢山なプログラムとなった。

基調講演では松下正明東大名誉教授が「偏見と尊厳―新しい高齢者像を求めて―」と題して、Ageism(高齢者偏見・差別)排除の努力すなわち高齢者の人権や尊厳を守ることの認識が重要で、これからの超高齢社会では「認知症とともに生きる living well with dementia」の実現にどのようなエイジングを送ればいいのか、新しい高齢者観があるとの示唆に富むご講演であった。

特別講演Ⅰは「納棺夫日記」の作者である青木新門氏に「いのちのバトンタッチ」、特別講演Ⅱでは鎌田実東京大学大学院教授の「高齢社会におけるロボット技術の活用」、特別講演Ⅲでは厚労省の

大田秀隆先生から「認知症施策の動向について」と題し、現在の状況と今後の課題が述べられた。

老年精神医学は、全人的医療を必要とする領域である。シンポジウムでは病態対応だけでなく、認知症にとつてのまちづくり、施策等も含め認知症を取り巻く諸問題をテーマに熱心に検討された。教育講演では各分野における専門の先生方に講師をお願いし新しい知見、ガイドライン等も含め老年精神医学に携わる者としての知識を深めた。ワークショップでは認知症高齢者の意思決定という法

平成二十八年度医学類

オープンキャンパス開催の報告

今年度の医学類オープンキャンパスは、例年通り金沢大学全学での開催日に合わせ、平成二十八年八月九～十日の両日、医学類第三講義室にて行われました。

午前・午後の部から構成され、二日間合計四回のプログラムで開催されました。参加者は一日目が二百六十五名、二日目が二百四十名と、二日間で合計五百五十五名を数え、講義室は二日間ともにほぼ満席状態となりました。オープンキャンパス参加者は高校一年生がその約半数を占め、残りは高校二・三年生でしたが、なかには既卒生、保護者の方の参加もありました。出身県は、北陸三県以外にも関東、関西、中京に加え、新潟、長野、群馬、静岡、遠く沖縄などからの参加者もあり、金沢大学医学類に対する関心の高さが感じられました。

オープンキャンパスのプログラムは、金沢大学医学部の古き良き伝統を伝える「金沢医科大 学時代の教育・研究・診療風景」のDVD鑑賞に続き、一日目は教育委員長・市村宏教授から、二日目は入試委員長・原田憲一教授から、医学類の概要と入試・教育内容について説明がありました。その後、一日目は教育委員会委員・尾崎紀之教授から、二日目は学生支援委員長・河崎洋志教授から、医学類での学生生活、教育カリキュラム、メディカルリサーチトレーニング(MR T)プログラム、サークル活動などについての説明がありました。模擬講義では、一日目午前には細菌学・藤永由佳子教授による「細菌感染」というタイトルで分かりやすい丁寧な説明があり、二日目午前には「新しい医療技術の開発のために」というタイトルで臨床開発部・村山敏典教授から臨床研究について実践的な講義が行われました。両講義ともに参加者にはとても好評で、医学を志すための良い刺激になったようです。研究室紹介では、

律的倫理面を捉えdiscussionに沸いた。希望者にはCCRC (Continuing Care Retirement Community) と呼ばれる最新の高齢者施設「シェア金沢」の見学。翌二十五日(土)は市民公開講演会を金沢東急ホテルで開催し市民の認知症への理解を深めた。参加者も三百人であった。二〇二五年には団塊世代が後期高齢に突入する。認知症対策は国を挙げて取り組まなければならない喫緊問題である。ますます当学会の役割が期待されている。更なる学会の発展に少しでも金沢学会が貢献できればと願っている。

一日目午後は、細胞分子機能学・安藤仁教授による時間薬理学についての研究の重要性の紹介があり、二日目午後には脳機能制御学(脳神経外科)・中田光俊教授による教室紹介が行われ、基礎的な脳科学から最先端の脳外科手術について分かりやすい説明がありました。参加者にはとても好評で、研究にも臨床にもとても興味を持てたとの声が聞かれました。

最後に教員・在学生との懇談会が開かれ、参加者に記載してもらったアンケートをもとに、山本が司会進行役として質疑応答するという形式で行いました。今回の参加教員は、医学類教育委員会・入試委員会から、藤永、野原、田嶋、安藤、村山、川尻、村松、中田の各委員で、熱心な対応をしていただきました。また、在校生の代表として一、五年生の八名の学生さんに参加してもらい、本学医学類のキャンパス、入試、学生生活、授業、勉強、MRT活動、サークル活動、アルバイト、将来の夢、等々に関する具体的な生の声が参加者に届けられ予定された

時間が足らなくなるくらい大変好評でした。

全体を通じて、金沢大学医学類への関心の高さを感じさせるオープンキャンパスとなりました。参加者が金沢大学医学類のこれまでの伝統と研究教育診療の魅力について十分理解し、高い志で金沢大学医学類への進学を希望してくれることを願っています。最後に、医学類オープンキャンパス実施にご協力いただきました医学類教育委員会・入試委員会の先生方、在校生代表の学生さん、そして開催運営にご尽力いただきました医学類学生課の職員の皆さんに感謝申し上げます。(医学類学生募集委員 山本 靖彦 記)

十全昔話

太田 謙(昭和四十年卒業)

学生時代(一)

大学の教養課程もあと四ヶ月になった頃、友人に謡曲を習わないかと薦められた。金沢では茶の湯と謡曲の素養がないと一人前に見られないという。まあ何でもやってみようと、紹介されるままにお師匠さんについた。師匠のまえに正座して、師匠が一節謡うと私がそれを繰り返す。上級者は師匠を前に一人で謡い、時々師匠が手直しする。テープレコーダーの未だない時代で、一冊(二演目)あげるのに週一回の稽古では、私は随分日数がかかった。

ある日稽古に行くとき先客がいて、控えの間で終わるのを待っていた。その時玄関からの襖が開いて一人の若い女の人が入ってきた。丁寧に畳に手をつけて、私に挨拶した。美しい人であった。私の胸は高鳴った。上着の左胸に女子短大のバッジが光っていた。動悸が少し治まってから私は「何時から謡曲をおやりですか?」と聞いた。彼女は「子供の頃からです」と答えて微笑んだ。この人の先に謡うのが恥かしくなり、先客が稽古を終えて控えの間に下がってきた時、「私はひまですから、どうぞお先に」といった。彼女はとんでもないと押し問答になりかかった。師匠が顔を出して「何ゆうとるがや、早うはいらんね」。

その翌日柿木畠のYMCAに行こうと兼六公園を通り抜けたところで、昨日の女短大生とばったり出会った。むこうも覚えていたらしく立ち止まってにっ

こり笑った。私の心はとろけそうになった。意を決して「この先いい音楽を聴かせる喫茶店があるので一緒にしませんか?」と誘った。「何というお店ですか?」「香林坊の寿苑です」。少しなら、と云う事で連れ立って店に入った。メンデルスゾーンがかかっていた。自己紹介のような当たり障りのない話の途中、彼女が曲名を聞いてきた。クラシック音楽は謡曲と違って私の得意分野だったので、少々蘊蓄を披露した。それから話が弾んで、国文学専攻の彼女は室生犀星や泉鏡花などの金沢ゆかりの作家について話した。あつという間の二時間であった。携帯電話のない時代だったから、次の約束をしておかねばならない。電話しても家人が彼女に取り次いでくれない公算が大きい。以後ほぼ週一回のペースで、寿苑で待ち合わせた。雪の日もあったが苦にもならず、夢のような二ヶ月が過ぎていった。ある日彼女がお店を変えてはと言いだした。どうも誰か知り合いに見られたらしい。男女交際がまだまだうさかった頃だ。「モンシエール(Monsieur)」と言う店が片町にあるからそこにしよう。シャンソンを聴かせるんです」と私が言うと、彼女はちよつと困った顔をして、言い淀んだ。具合の悪い店なのかと問うたが、そうではないと言う。一呼吸おいて、彼女は消え入るような声で「ムッシュウでは...」。そうか、そう読むのか。頭に血が昇り、恥ずかしさに顔がほてるのが判った。気まずい沈黙が流れる。笑いとはせよというような事なのに、若さが過剰反応を起こした様だ。彼女は「外へでましようか」と言って立ち上がった。暫く歩いたが無言の私をな



だめるすべを、若い彼女は持たなかった。寄る所があるからと彼女は右に曲がっていった。暫くして私は次の約束を取り付けていない事に気づいた。何ということだ。三月に入って後期の試験も終わり、彼女に会えぬまま私は大阪の実家に帰った。

四月になつていよいよ専門課程に進んだ。解剖学や生理学など基礎医学が始まり忙しくなった。彼女のことを忘れたわけでは決して無かったのだが、忙しにかまけていた。息抜きに囲碁でもと思い友人宅に行った。橋場町の碁席に行く事になり二人でぶらぶら歩き出した。金沢屈指の料亭「大友楼」に差し掛かったとき門から十人ばかりの男女が出てきた。女はみんな和服で、男も二人ばかり和服だった。驚いた事に中央に彼女がいるではないか。いっぱしの大人ぶりだ。よそから来た学生風情では入れない大人の世界を感じた。私は道の端を逃げるように小走りに過ぎた。彼女が私に気がついていたかどうかは不明だった。同行の友人は「あれはお見合いやつちゃ。若い娘はええ着物やった。わしや友禅と思うがや」といった。私は「囲碁はやめじや！飲みにいこう」。

梅雨に入り鬱陶しい日が続いた。シヨックは大きかったが、此の頃大分心は落ち着いてきていた。ある日下宿に帰るとおかみさんが包みを私に渡しなうらいった。「あんたもえらい綺麗な人と知り合いなやねえ。隅に置けんがいね」。自室に飛び込み、震える手で包みを開いた。芝舟（金沢の銘菓）一箱と白い封筒が出てきた。封を切り手紙を読んでいると、涙が溢れて文字がかすんできた。

短い間でしたけれど 本当に楽しい時間を有難うございました
この秋 私は嫁ぐことになりました
どうか素敵なお医者様におなり下さいませ

六十年前の話である。

かしこ

学生時代 (二)

その春教養課程を終え、私は医学部に進学した。下宿も金沢城内の教養部に近い橋場町から、医学部近くの小立野に移った。新しい下宿は昔檜の御指南番だった人の家で、明治に入って何かの仕事場だったらしいが、当時は二階に五室の下宿屋になっていた。下宿人は工学部一名と医学部四名で、二人の学部の先輩がいた。

二年目は雪が多く大阪育ちの私には珍しかったが、後の昭和三十七年豪雪で雪の恐ろしさを知ることになる。夕食を下宿で終えてから、雪道を大学に向かった。九月から始まった解剖実習は厳しく、神経叢はスケッチをしなければならなかった。頸部神経叢では山田教授から三度スケッチを戻された。「アンザの概念が解つてない」。

概念もクソもあるものか、美術部の連中のは一度で通つたではないか、などと八つ当たりしながら解剖教室に向かった。早く仕上げないと次に進めないの仲間間に迷惑がかかる。死体一体に三人の学生がつく。ホルマリン処理の死体に死臭はない。今は腹部だ。迷走神経とはうまく名付けたものだ、などと思ひながら神経を剥離してゆく。すると廊下に足音がして守衛が顔をのぞかせた。「雪おろ

し済んどらんがで、氣をつけてたいね」。解剖学教室は校舎の南西の角に突き出た平屋である。古い建物なので物騒だ。だが、どうするのか。ミシッと音がすれば逃げるのか。まあ、ままと作業を続けたが、なんだか寒くなってきた。石炭ストーブの燃料が乏しい。足そうとしたが石炭が無い。雪の中へ取りに行くのは面倒臭いので、なにか燃やせる物を探した。部屋の片隅に古びた丸椅子が目に入った。置きっぱなしになっていて、誰も使っていない。しめしめとばかりに叩き壊して焚口から入れた。ところが足が長くて、先が焚口からはみ出している。まあ、いずれ押し込めば良いと解剖台に戻った。

そこへ「精が出るね」と声を掛けられて私は飛び上がった。山田教授だ。椅子を壊した時の音を不審に思つて見に来られたらしい。私は立ちあがり急いでストーブの前に行き、突き出た椅子の足を教授の視線から隠そうとして、ストーブの焚口を背にして立った。教授は死体を覗き込み、二、三質問してから引き上げようとなさった。その時、笑いを押し殺すような、妙にくぐもつた声で一言。

「君はそんなに尻が寒いのかね？」。

その春、我々は基礎医学を終え全員無事に臨床医学に進んだ。

学生時代 (三)

私は学生時代の六年間を金沢市で過ごした。昭和三十年代の事である。前半の三年間は玄蕃町三ツ巡りと言う、浅野川沿いの入り組んだ町並みの中で暮らした。ここは東郭や主計町といった色里に近く、お姿さんを囲うのに適していたようだ。今は橋場一丁目に町名が変わって

いる。

木村さんという七十歳前後の、京言葉を使う小綺麗な婦人が近くに住んでいた。下宿のばば様によると昔は京都の芸妓で、金沢の店の息子に落籍されてここに住まわっているとの事だった。その息子というのは京都で大学を出たあと、故郷の金沢に帰らず遊んでいたらしい。実家から嫁をもらってやるから帰ってきて家業を継ぐようにと言われた時、彼は木村さんをつれて帰ることを条件にしたという。両親がそれを許したので、本宅と妾宅の二軒を同時にもち若旦那が出来たのだそう。明治が遠くなったというのは、本当である。

金沢の繁華街である香林坊に、そのころ常盤座というストリップ劇場があった。そこあたしかマリコという踊り子が、私の下宿の近くに住んでいた。三十近くの人だったと思う。小松市に旦那がいて時々彼女のもとに通っているようだった。当時は各家にすべて電話があった訳ではなかったので、下宿にマリコが電話を借りに来たり掛かってきた電話を下宿の奥さんが取り次いだりしていた。

ある雪の夜電話が鳴った。夜九時を過ぎると下宿先の一家は寝てしまふ。やむを得ず私が受話器を取った。小松の旦那からだ。「学生さんけ、今日わし行けんてマリコに言うてたいね。……ハイ」。ぶつぶつ言いながら、雪の中を十数メートル先のマリコの家へ行った。呼び鈴を押すとマリコは旦那のお越しと思ったのであろう、直ぐに姿をみせた。彼女を見たとき私は急に動悸がたかまり、脈拍が早まるのを感じた。

いつもの彼女と違う。紅い肌襦袢の上

に花柄の着物をはおっている。あとで氣がついたのだが、彼女はそのとき既に情事への想いに身を委ねていたのだ。「あのう・・・こ、小松のひ、人がこ、これんで電話があつて・・・」。彼女はしどろもどろの私の顔をみて、「ああ、そんながかね」と言った。ふつと表情に翳りがみえたが次の瞬間、彼女の顔に笑みが広がっていた。あんな魅惑的な女の笑顔はそれまで見たことがなかった。私の背中に電流が走った。彼女は私に顔を近づけて、二の腕を取ってささやくように言った。「寒いかに、わざわざ来てくれてありがとね。一寸上がって暖まっていきまっしね。酒の爛もついとっし・・・」女の匂いが迫る。私の脳味噌はぶつぶつ煮えたぎった。年上女のみせる媚態にほじめて出会い、初心な私は圧倒されてしまった。わが身の危機であった。

表通りの散髪屋のおやじが、風呂敷包みをもって私を訪れたのは夏の夜であった。「あんた、医学部にいつておいでるんやろ」「ええ、まあ」。おやじは風呂敷包みを解いて中から金網が張られたかごととりだした。かこの中には真つ黒な大きな猫がいた。度肝を抜かれた私に彼は言った。「実験に犬やら猫を使うとるんでないけ？ほやったらこれあげっし、持つていくこっちゃね」。この春専門課程に進んでいた私は、生理学教室で実験用の動物が不足して、業者から高値で購入している事を知っていた。猫なら一匹五百円で引き取ると聞いた記憶があつたのでそれを話すと、おやじは笑って言った。「お金のこたあ、あんたに上げっちゃよろしゅうたのむわいね」。その途端、私の脳裏に五百円の文字が燦然と輝いた。

下宿代を含めた一ヶ月の家からの仕送りが六千円だった頃の五百円である。大きい。金に目が眩んだ私は、翌日何の躊躇もなく猫を大学へ運んだ。生理学の助教は金を私に渡して言った。「又持つてこいよ」。だが世の中そんなに甘くない事はすぐ判った。

その夕方、下宿の奥さんが険しい声で私を玄関に呼んだ。出てみると散髪屋のおかみが目を泣き腫らし、手にハンカチを握りしめてたたきに立っているではないか。私は棒立ちになった。

「あんた、この奥さんに何しまさった？」と言いがらば様も出てきた。大人の女三人に見据えられて、私の喉はひきつった。ばば様と言う。「あんた、奥さんの猫を大学へ持つていったそやの。旦那さんが白状しまさったがね。子供がおいでやないさけ、奥さんの猫は子供と一緒に。なんちゅう、だらな事するがや。はよ猫を連れ戻しにいきまっし！」。どうやら夫婦喧嘩の腹いせに、おやじが企んだ事のように。「学生さん、猫のおる所の地図書いてくれんけ。今から自分でいくさけ」と、おかみが泣きじやくりながら言った。私が小刻みに震える手で地図を書いて渡すと、おかみはすつとんで行つた。猫はまだ無事だったという。

夜になって、私はばば様に呼びつけられた。「あんた、人の心が判らんで医者様になるがや。親御様はどんな気持ちでお金送つておいでると思うがや。大体あんたはテニスたら、わいむしい(YMC A)たら遊んでばつかやないけ。いつかもドイツ語の試験にあんた来とらんで、伊藤さんから電話あつたぞいね。それに

やね・・・」。

金沢の夜は長かった。

ところで、私が貰ったあの五百円はどくなつたのだろう。その部分の記憶は欠落している。

碁盤の儀

金沢の街を、香林坊から兼六園へと歩いてみた。五十年前位前に学生だった私は、浅野川に架かる天神橋の袂に下宿していた。兼六園を通つて香林坊まで、よく歩いたものだ。

卒業後金沢を訪れることに金沢駅周辺が変貌して行くのは目にしていたが、街中を通るのはほぼ四十数年振りだった。香林坊から柿ノ木畠を通つた時、余りの変わり様に驚いた。商店街のアーケードの立派な事、いや、これは昔を知る私にはもう外国だ。建て替えられてはいたが「蛇の目寿司」と「キリスト教会」が残っていたので、やつと方角の見当がついた。わだかまつた気持ちで広坂に出た。観光会館がなんと金沢歌劇座に変わつていて、「ラ・ボエーム」の看板が出ていた。少しでも良いから昔の面影が欲しいと思つて歩いていたら、やつと出会えた。石浦神社だ。

懐かしくて入ろうとした時、立て看板が目に入った。「七五三・碁盤の儀」とある。何のことかわからず、半被を着て庭を掃いている老人に尋ねた。彼は「七五三を迎えた子供が、碁盤に乗って飛び降りるんやわ。意味はわからんがで、社務所で聞いてたいね」と言う。私は社務所に入り、神主さんに教えを乞うた。なんでも徳川五代將軍の若君が碁盤からとび降りたことに端を発するとの

事だ。七五三の行事は平安時代には宮中儀式の一つであつたが、後年將軍家へ皇女がお輿入れになつて、その儀式が江戸城に持ち込まれたという。なぜ碁盤から飛び降りたのかは不明だと言う事なので由来の意味が分明的でないし、その若君が六代將軍になつたかどうか判らない。「七五三・碁盤の儀」は赤坂の日枝(ひえ)神社で行い継がれていて、地方では氏子に城持ちがいる山王系の神社(日枝神社の分枝)で行われてきた。第二次世界大戦のあと七五三の儀式が一般大衆にも行われるようになったが、「碁盤の儀」だけは山王系神社でのみ行われると言う。紋付羽織袴の男の子や着物の女の子達が騒いでいた。「女の子も碁盤から飛び降りるの？」と聞いたら「あつたりまえや！」と答えて走り去つた。どうやら町だけでなく、子供も変わつてきているらしい。



学生コーナー

自分の原点

医学類四年 西川 和希

十全同窓会の皆様、初めまして、医学類四年の西川和希と申します。朝夕ようやく過ぎしやすい季節になってまいりましたが、皆様いかにお過ごしでしょうか。この十全同窓会会報の学生コーナーを書かせていただけることを大変恐縮する反面、嬉しく思っております。ここまでの学生生活を振り返ると、勉強や部活等に追われ、あつという間に約三年半という年月が過ぎて参りました。また、臨床講義が始まり医師としての仕事によりリアルティをもつて想像することができるようにもなってきました。この時期に、このような形で自由に考え、書かせていただける機会をいただいたので、一度立ち止まり、私の医学を志した原点を思い出し、目指すべき姿について綴らせていただきたいと思います。稚拙な文書ではございますが、ご一読いただければ幸いと思います。

私は、大阪で生まれ、昔から人の健康と関わりていくような仕事をしたいなと思い、医師を目指していましたが、浪人を経ても医学部に合格することができませんでした。その時に知人の薬剤師から、「薬剤師になったとしても、君の思い描く医療人としての姿になることが可能であり、実際に自分は実現させている。」という話を伺うことができ、その方の話に納得したので、他大学の薬学部に入学することを決意しました。そこで

の講義や実習によって、薬剤師としての関わり方を学ばせていただきました。さらに、医療系の大学生になったというところで医療に携わる身としての教養や考え方を知らうと、様々な人の話を聞き、様々な本を読み、見聞を広めておりました。そのような時、心を揺さぶられるような出会いに恵まれ、自分の思い描くビジョンを一番可能にできる職業は、やはり医師ではないかと強く思うようになりました。それから一念発起して受験勉強を再開し、金沢大学に入学することができました。ここで、当時私が医師を再び志すきっかけとなった大きな出会いについて、いくつかお話しさせていただきますと思います。

まず初めに、医療に携わる者としての心構えに感銘を受けた一冊が、『パッチ・アダムスと夢の病院』という本です。これは、愛とユーモアをもつて患者と関わり、誰でも医療を受けることができるように無料の診療所を設立した、パッチ・アダムスという医師の考え方や生き方を記した一冊であるのですが、中でも私が特に感銘を受けた彼の考え方について、挙げさせていただきます。

「人間同士が接触すると必ず影響を与え合うので、深い友情や信頼関係があれば、多くの人は不安を忘れ幸せを感じ、幸せになれば健康に近づいてゆく。そのため、患者が病気という人生の暗闇の一時に、堅苦しい人間関係で医者と患者が向き合うのではなく、むしろ親しく尊敬しあえるパートナーとして一緒にその苦難を乗り越えることが必要である。医師の務めは、そのようにして死を遅らせるだけでなく、質の高い生を与えること

である。」

この一節には、非常に衝撃を受けました。なぜなら、私は大阪という土地で育ったせいなのでしょうが、人と話したり、笑いあったりすることが非常に好きで、大人になってもこの性格を活かしながら人々をより健康に導いていくことができればなんと漠然と将来を思い描いていましたところ、まさにそれを医業として行っている人に出会ってしまったからです。そして、人々の質の高い生に一番近く携わることができるのは医師ではないかと強く考えるようになりました。

次に、医師としての仕事の幅広さや奥深さを改めて考えさせられ、医師としてのなりたい姿が強固なものとなったのは、知人の小児科医の先生から話を伺った時です。先生は「子どもの頃の生育環境が、人格形成において非常に大切である。そのため、子どもの健康に関して家族にも十分説明し、環境を整えてあげること小児科医としての役割である。」という話を伺うことができました。

もちろん子どもは、自分の状況を把握する能力や医師の話す内容を理解する能力が低いので、家族の協力が必要であることは理解できていました。しかしそれだけでなく、自分の身体のことでないだけに、家族への丁寧な説明や家族に注意深く子どもの様子を見守るための環境作りが必要であることは、改めて納得させられることでした。このように患者を診るだけでなく患者の周辺も管理できるような広い視野と、周りの人々を納得させるコミュニケーション能力を持った人間を目指すようになりました。そのために、様々な人と話し、会話を通じて相手に心を開

いてもらうようになるには、どうすべきかをより考えるようになりました。

最後に、私が現在でも自分のモチベーションを保つ時に思い出す言葉があります。それは、偶然参加させていただくことができた、建築家の安藤忠雄さんの講演会の時、「自分は建築を独学で学んだが、その時どこに立っているのか、正しい方向に進んでいるのかさえ分からない。不安や孤独と闘う日々が続いた。そうした暗中模索が、責任のある個人として社会を生き抜くためのトレーニングになったのだろう。」という話です。当時、私は先に述べてきたように再び医師を志す決意を強く固めておりましたが、何度も叶わなかった世界への挑戦であったので、全ての不安を取り除くことは正直できない状況にありました。そのような時のこの話は大きく私の背中を押してくれ、情熱を絶やさずここまで頑張り続けることができました。

以上のような経験を通じて、私は今幸運なことに医学生として学生生活を送っております。この先も様々な事柄が待ち受けていると思いますが、これまで得た経験やこれから出会う人々に影響を受けながら、自分の糧にして豊かな人間になりたいと思っております。

(医学類四年 西川 和希 記)



第十回金沢大学

ホームカミングデイ開催

今回で十回目となる「金沢大学ホームカミングデイ」を平成二十八年十月二十九日(土)に開催いたします。今年、新しい試みとして午前中にキャンパス見学会を計画しました。また、今年で五回目となる「留学生ホームカミングデイ」を、今年も同日に開催いたします。

ホームカミングデイ当日は、角間キャンパスにて「第五十三回金大祭」(十月二十九日(土)～十月三十日(日))の開催期間中であり、「ふれてサイエンス&てくてくテクノロジー」も開催され、各種催しや展示等を自由にご覧いただけます。また、金沢城公園では写真展「よみがえる城内キャンパス」を開催いたします。

懇親交流会(参加費無料)は、角間キャンパスの紅葉をお楽しみいただきながら、お気軽にご参加いただけるよう、企画しております。

ご家族や同期生、サークル仲間のみならず、一緒に、紅葉の金沢へどうぞお越しください。学友支援室ホームページ

2016年10月29日(土) 第10回金沢大学ホームカミングデイのご案内

● キャンパス見学会

① 10:00～11:30 10時から、現地集合場所にて受付を行います。
・高学コース 金沢キャンパス理学部F棟玄関
・保健コース 金沢キャンパス保健学館1号館玄関
・国際コース 金沢キャンパス国際学館
3コースの方は見学会終了後、周回バスで角間キャンパスへ向かいます。

② 11:00～12:00 11時から、角間キャンパス 自然科学本館
アカデミックホールにて受付を行います。
・角間地区コース(自然科学部)
・角間地区コース(国際学館)

12:30 受付開始(キャンパス見学会以外の方)

13:30 第10回ホームカミングデイ歓迎典
会場: 角間キャンパス自然科学本館
・金沢大学教職会館 ・学長室
・高学館教職会館 ・学友会会館
・高学館教職会館 ・学友会会館

14:30 特別講演 和田 健夫氏 東北大学小児科長(昭和50年法政大学卒業)

15:30 学友会第6回役員総会

16:00 懇親交流会 大学主催・参加費無料
会場: 角間キャンパス(南陽館)1階 食堂

17:30 閉会

写真展 「よみがえる城内キャンパス」 10時～19時(入場無料)

に、開催情報を掲載しています。

◎ 参加費…無料

◎ 申込み締切…十月五日(水)

◎ 申込み・プログラム等の詳細は左記へお尋ねください。

【金沢大学学友支援室】

TEL 〇七六―二六四―五〇八一

FAX 〇七六―二三四―四〇三三

メール gakuyu@adm.kanazawa-u.ac.jp

(学友支援室長 越野 衛一 記)

医学展

去年に引き続き今年度も医学展を開催する事が決定致しました。十一月五、六日の土日(二日間)の開催を予定しています。二〇一六年度医学展開催に向けて同窓会の皆様方にはご支援ご協力賜り、医学展実行委員一同深く御礼申し上げます。

医学展の歴史は古く、今を遡ること六十五年の昭和二十七年官立金沢医科大学時代に始まります。その当時から現在に至るまで医学展は学生が医学を発信する場であると同時に医学を見つめ直すことのできる場でありました。昨年度は北陸新幹線開通により金沢市の魅力を発信された年であったように、医学展も「Antenna」かがやき発新源」というテーマを掲げ、学生の手によって医学を発信し一生懸命な姿を届けることができ大成功をおさめることができました。今年度も医学展を開催させていただけることに感謝し、先輩方が築き上げた伝統と誇りを胸に真摯に取り組ませていただきます。

今年度の医学展のテーマは「CHANGE」

です。このテーマには医学展が学生や地域の方など誰かの生活が豊かになるきっかけになれたらという思いが込められています。医学展が多くの人にとって医学を見つめなおす・考える・感じる機会になってほしいと私は考えています。作り手である学生にとっては医学を発信する立場であり普段とは全く異なる視点で医学を見つめなおす機会に、受け手である来場者にとっては医学医療について気軽に楽しんで触れ感じる機会になればと思います。

今年度も老若男女問わず楽しんでいただけるよう多種多様なイベントを企画させていただきます。医学に触れる体験ブースを始め、学生たち手作りの模擬店、医学展を盛り上げるステージ等があります。医学を体験するばかりでなく学園祭としても楽しんでいただけたら良いなと思います。今年の新たな取り組みとして金沢美術工芸大学とのコラボレーションを行う予定です。当日は美大生が宝町キャンパスにてペイントアートや即興の似顔絵描きなどが行われる予定です。さらに敷地内のプロムナードの完成に伴い今年度はステージや模擬店の配置が変更される予定です。より一層来場者に分かりやすく安全に楽しんでいただけたら幸いです。

このような機会を与えていただいたことに深く感謝しつつ学生として今何ができるかを考えながら精一杯取り組んでいく所存でございます。お忙しい中恐縮ですが足を運んでいただけたら幸いです。末筆ではございますが日ごろからのご支援、ご鞭撻に感謝して挨拶とさせていただきます。

(医学類五年 森山 柁純 記)

編集後記

リオデジャネイロ夏季五輪の熱狂が飲み込んだ灼熱の夏が終わろうとしている。本大会で日本人は「進化」を証明した。日本が獲得したメダル数は事前の予測を上回る四十一(金十二)で、前回ロンドン大会の三十八(金七)を抜き、史上最多を更新した。総メダル数で世界ランク五位である。北陸から五つのメダル(金三)が生まれたことはとりわけうれしい知らせだった。本稿執筆時点で開催中のパラリンピックでも日本人の活躍が続いている。様々な境遇にある多くの日本人が、勇気とパワーをもらったに違いない。五輪を一時の熱狂に終わらせず、四年間のモチベーションに繋げたい。

アカデミズムにおいても、日本が、金沢大学が、生き残りをかけた激しい競争の最中にある。「研究や医療で大きな仕事を成し遂げ、歓喜の涙を流してみたい」と決意してはや何年(何十年?)…。私たち十全同窓生は、金沢大学でいい仕事をすること、日本と世界の医学進歩に貢献したい、と願っている。Think globally, act locallyである。十全同窓会誌の本号では、新たに教授に就任されたOB、先進予防医学共同大学院シンポジウム、十全医学賞、高安賞、黒川良安賞、スロイス賞、病院の受賞、そして各支部で活躍するOBの記事等でひととき華やかな誌面となった。日本人、とりわけ金沢大学OBの活躍を読むと無条件にうれしく、「私もがんばろう」という気持ちになる。十全同窓会会報が、時空を超えて、離れ離れになった同窓生をつなぎ、互いを高め合う崇高な同窓意識を醸成することを切に願い、本号の編集を終える。

二〇一六年夏の終わりに、簗 俊成